

福岡市早良区
藤崎遺跡
IV

第8・10・11次発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第138集

1986

福岡市教育委員会

[訂正挿図]

藤崎遺跡に関する文献

- ① 島田寅次郎「藤崎の石棺」「福岡県史調査記録天然記念物調査報告書」第一輯 1925
- ② 中川平次郎「古文部省監修沿革(一)」考古学雑誌第9卷第3号 1918
- ③ 永倉松男、鷹山猛「筑前國藤崎に於ける弥生式遺跡」考古学雑誌第2卷第1号 1931
- ④ 森貢次郎教授の御教授による「藤崎遺跡」1962年 所収
- ⑤ 池石哲也編「高速道路開通伴隨文化財調査報告書! 藤崎遺跡」福岡市教育委員会 1981
- ⑥ 鶴山猛「要摺集考(一)」史蹟 第55輯 1953
- ⑦ 池石哲也編「藤崎遺跡」福岡市教育委員会 1982
- ⑧ 井沢洋一編「藤崎遺跡」福岡市教育委員会 1986

地名 西側火葬	遺跡名	所在地	面積	調査期間	事業名	時代	遺構	備考
第1地点	第1地点	福岡市早良区 藤崎1丁目14		昭和4年3月19日	川庄五郎氏宅	古墳時代	箱式石棺	三内壁二神龜虎頭 茎環頭火刀
第2地点	第2地点	福岡市早良区 藤崎1丁目38	大正6年 昭和5年	村上研究所	弥生時代～ 古墳時代	箱式石棺・豪華多	方格溝文鏡	
第3地点	第3地点	福岡市早良区 亘通2丁目3		昭和30年代	田原務所	弥生時代	豪華墓	
第4地点	——	福岡市早良区 高取2丁目17	約400m ²	井戸掘削	弥生時代	豪華墓…1基	彩文土器(蓋)	
第1次	第4地点	福岡市早良区有道 (西側火葬)	4.52m ²	昭和37年4月 昭和37年4月 (地下鉄)	高速鉄道	弥生時代～ 中世	豪華墓…1基 石室墓…4基・土塁墓…2基	符號墓…1基 住居跡…1基
第2次	第5地点	福岡市早良区 高取2丁目17	439m ² 6188-39324	昭和37年 4月14日-7月31日	テナントビル	弥生時代～ 中世	方格溝墓…1基 豪華墓…1基 土塁墓…1基	
第3次	第6地点	福岡市早良区 亘通2丁目2-807	2,700m ²	昭和58年 昭和58年 昭和58年	バスター・ミナル	古墳時代初期 奈良時代中期 奈良時代後期	豪華墓…3基 土塁…4基・住居跡…7軒	三内壁二神二牛馬 輪文鏡
第4次	第7地点	福岡市早良区 亘通2丁目	約43m ² 昭和58年 昭和58年	昭和58年 昭和58年 昭和58年	地下鉄出入口 A	古墳時代初期	豪華墓…1基 豪華墓…2基	豪華墓…1基
第5次	第8地点	福岡市早良区 高取2丁目1	約101m ²	昭和58年 5月29日	地下鉄出入口 B	弥生時代初期	豪華墓…2基 石室土成墓…1基	
第6次	——	福岡市早良区 高取2丁目18	約150m ²	昭和57年12月	地下鉄出入口 C	弥生時代	豪華墓…5基	
第7次	——	福岡市早良区 藤崎1丁目1	200m ²	昭和58年 昭和58年-昭和59年	脇骨院増築	弥生時代	豪華墓…3基 2基…2基	
第8次	——	福岡市早良区 高取2丁目144-145	532m ² 昭和58年 昭和58年-昭和59年	昭和58年 昭和58年-昭和59年	テナントビル	弥生時代～ 中世	豪華墓…2基 2基…2基	
第9次	——	福岡市早良区 藤崎1丁目2-29	244m ²	昭和58年2月8日	貸賃住宅	弥生時代～ 中世	豪華墓…1基・溝…4基 土塁…3基・住居跡…3軒	
第10次	——	福岡市早良区 高取2丁目146他	1,953m ²	昭和58年 昭和58年-昭和59年	分譲住宅	弥生時代～ 中世	豪華墓…1基・溝…2基 土塁…4基・井戸…1基	
第11次	——	福岡市早良区 亘通2丁目	443m ²	昭和60年 10月22日 11月15日	テナントビル	弥生時代～ 中世	豪華墓…4基 溝…3基	

福岡市早良区
藤崎遺跡
IV

第8・10・11次発掘調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第138集

昭和61年3月31日
福岡市教育委員会

序 文

早良区役所周辺は、近年の開発に高層化が進んでいますが、この一帯は古砂丘上に形成された藤崎遺跡が存在する地域でもあります。昭和56年に開業した福岡市営地下鉄に伴った発掘調査では弥生時代の雙棺墓群や古墳時代～奈良時代の住居跡が検出されました。又、バスター・ナル建設に伴い発掘調査では方形周溝墓を検出し、三角縁神獸鏡が出土するといった貴重な成果をもたらしています。

今回報告する第8, 10, 11次調査では、雙棺墓群と元寇墳群に関連すると考えられる中世の構を検出しました。本書は、そうした調査の成果を記録したものですが、本書が広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料整理にいたるまで多くの関係者からいただいた助言・指導・御協力に対し、深甚の敬意を表するものであります。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 佐藤 善郎

例 言

1. 本書は福岡市早良区藤崎に於けるテナントビル建設に伴い、調査費の原因者負担によって実施した緊急発掘調査報告書である。藤崎遺跡の既報告としては、「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ、藤崎遺跡」(1981) 「藤崎遺跡」(1982), 「藤崎遺跡Ⅲ」(1986) の3冊がある。
2. 本書には昭和58年度の第8次調査、昭和59年度の第10次調査、昭和60年度の第11次調査を収録している。
3. 本書に収録した発掘調査は、第8次調査—田中寿大、第10次調査—井沢洋一、米倉秀紀、第11次調査—山崎龍雄、米倉が担当した。
4. 本書掲載の文書について、第8次調査は、遺構を田中、遺物を田中、谷沢仁、第10次調査は、遺構を井沢、遺物を谷沢、第11次調査は遺構を米倉、遺物を白石公高、米倉が担当した。
5. 本書掲載の遺構、遺物の実測は以下の通りである。

第8次調査 遺構実測—田中、遺物実測—谷沢(變換)、田中

第10次調査 遺構実測—井沢、宮田昌之、清原ユリ子、遺物実測—谷沢、米倉、井沢

第11次調査 遺構実測—米倉、谷沢、清原、遺物実測—山崎龍雄、米倉

※唯筆の壺形土器は山崎純男によるが、報告にあたっては井沢が一部加筆した。

6. 本書掲載の遺構・遺物の著者は、第8次調査—田中、第10次調査—遺構：池田洋子、遺物：深堀博子、第11次調査—遺構：深堀、遺物：米倉、池田である。

7. 本書の執筆は以下の通りである。

I～IV章——井沢

V章 第8次調査—田中

VI章 第10次調査—井沢、谷沢、米倉

VII章 第11次調査—山崎、米倉

VIII章——井沢、本田光子

8. 本書の編集は調査担当者が地点毎に各々行ない、合本に際しては、谷沢、池田、深堀の助言を得て、井沢が担当した。

本文目次

序文	本文頁
I章はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 第8次調査の組織	1
3. 第10次調査の組織	2
4. 第11次調査の組織	2
II章 遺跡の位置と環境	7
III章 調査の記録	8
1. 藤崎遺跡発掘調査地点の概要	8
IV章 第8次調査	9
1. 調査経過の概要	9
2. 造構各説	11
3. 遺物各説	12
4. 小 結	16
V章 第10次調査	17
1. 調査経過の概要	17
2. 造構各説	17
3. 遺物各説	25
4. 小 結	35
VI章 第11次調査	38
1. 調査経過の概要	38
2. 造構各説	38
3. 遺物各説	41
4. 小 結	46
VII章 第4発見地の報告	47
1. 発見の概要	47
2. 出土遺物について	47
3. 小型彩文壺形土器に用いられた赤色顔料について	49

挿 図 目 次

第1図	早良平野の遺跡分布図	(縮尺1/50,000)	3
第2図	藤崎遺跡周辺地形図(昭和初期頃)	(縮尺1/5,000)	4
第3図	藤崎遺跡周辺地形図	(縮尺1/5,000)	5
第4図	藤崎遺跡調査地区配置図	(縮尺1/4,000)	6
第5図	藤崎遺跡第8・10・11次調査地点配置図	(縮尺1/400)	折込
第6図	第8次調査遺構配置図	(縮尺1/100)	10
第7図	1号・2号甕棺出土状況図	(縮尺1/20)	11
第8図	調査区東壁断面土層図(1号・2号溝切り合い部分)	(縮尺1/80)	12
第9図	1号井戸平面図、及び断面上層図	(縮尺1/60)	12
第10図	1号・2号甕棺	(縮尺1/6)	13
第11図	2号溝出土遺物	(縮尺1/3)	14
第12図	2号溝、及びその他の出土遺物実測図	(縮尺1/4, 1/3)	15
第13図	第10次調査遺構配置図	(縮尺1/100)	18
第14図	1号・3号・4号・6号甕棺墓	(縮尺1/30)	20
第15図	5号甕棺墓、1号～3号土壙	(縮尺1/30)	21
第16図	4号～6号土壙	(縮尺1/30)	22
第17図	1号～3号溝断面上層図	(縮尺1/40)	24
第18図	1号～3号甕棺	(縮尺1/10)	27
第19図	4号～6号甕棺	(縮尺1/10, 1/6)	28
第20図	2号・3号溝包含層出土遺物	(縮尺1/3)	30
第21図	包含層出土遺物	(縮尺1/2, 1/3)	32
第22図	包含層、搅乱出土遺物	(縮尺1/3)	33
第23図	包含層、搅乱出土遺物	(縮尺1/3)	34
第24図	藤崎遺跡方形周溝墓、及び方形周溝遺構配置図	(縮尺1/1,000)	37
第25図	第11次調査遺構配置図	(縮尺1/200)	38
第26図	1号～4号甕棺墓	(縮尺1/30)	39
第27図	1号～3号溝断面土層図	(縮尺1/60)	40
第28図	2号・3号甕棺	(縮尺1/10)	42
第29図	1号・4号甕棺	(縮尺1/6)	43
第30図	出土遺物	(縮尺1/3)	45
第31図	第4発見地出土遺物	(縮尺1/2)	48

図版目次

- 図版1 藤崎遺跡周辺航空写真(昭和55年11月撮影 1/50,000)
- 図版2 (1) 藤崎遺跡第8次調査地点近景(東から) (2) 調査終了完掘状況(南から)
- 図版3 (1) 1号甕棺墓出土状況(北東から) (2) 2号甕棺墓出土状況(西から)
(3) 1号井戸土層堆積状況(南から) (4) 1号井戸完掘状況(北から)
(5) 1号溝完掘状況(西から) (6) 2号溝完掘状況(西から)
- 図版4 (1) 調査区東壁における1号・2号溝切り合い状況(西から) (2) 1号甕棺
(3) 2号甕棺(上) (4) 2号甕棺(下)
- 図版5 出土遺物
- 図版6 (1) 藤崎遺跡第10次調査区近景(北から) (2) 調査区全景(南から)
- 図版7 (1) 1号甕棺墓(北から) (2) 3号甕棺墓(南から)
(3) 4号甕棺墓(北から) (4) 5号甕棺墓(南から)
- 図版8 (1) 6号甕棺墓(西から) (2) 2号土壤(南から)
(3) 3号土壤(東から) (4) 4号土壤(東から)
- 図版9 (1) 6号土壤 (2) 1号・2号溝(東から)
(3) 3号溝(北から) (4) 1号・2号・6号甕棺墓
- 図版10 (1) 1号溝土層状態 (2) 2号溝土層状態 (3) 3号溝土層状態
- 図版11 出土遺物
- 図版12 出土遺物
- 図版13 出土遺物
- 図版14 (1) 藤崎遺跡第11次調査区全景(北から) (2) 1号甕棺墓、2号・3号溝(西から)
- 図版15 (1) 1号甕棺墓(東から) (2) 2号甕棺墓(西から)
(3) 3号甕棺墓(西から) (4) 3号甕棺墓内人骨出土状態
- 図版16 (1) 4号甕棺墓(西から) (2) 出土遺物
- 図版17 第4発見地出土遺物

表目次

- 第1表 藤崎遺跡発見地及び調査地点一覧表.....8
- 第2表 第10次調査出土甕棺墓一覧表.....19
- 第3表 第11次調査甕棺計測表.....43

I 章 はじめに

1. 調査に至る経過

藤崎遺跡は博多湾岸に形成された砂丘上に立地し、古くは袖の松原と云われる風光明媚なところであった。福岡市の副都心である西新は鳥飼八幡社の門前町として栄えた町であるが、この町の西側に位置するのが藤崎である。近年まで松林と砂丘後背の田園地帯に囲まれた閑静な住宅地であったが、国道202号線がこの砂丘地帯を東西に貫くため昭和40年代の経済成長に伴い、交通量は増加してきた。更に昭和56年7月の市営地下鉄の開業によって住宅地は商業都市としての変貌をみせており、昔日の面影はない。昭和52～53年（1977～78）に地下鉄建設に伴い発掘調査を実施したが、これが福岡市教育委員会による正式な且つ、組織的発掘調査の第一歩であった。地下鉄開業と同時に西新・藤崎間の202号線沿線はテナントビルや高層住宅建設が連続しており、その対応に苦慮しているところである。今回報告する各発掘調査地点は旧道と202号線が交差する位置にある。いずれも高層化したテナントビル建設に伴うもので、福岡市教育委員会、及び事業主体者との間で協議を行った結果、調査費の原因者負担による発掘調査を実施することになった。

各調査地点は栄山から西北に伸びた小丘の北側に接しており、遺跡の分布範囲からすれば東南の縁辺に相当する。各調査区は東西に連続した調査地点でもあるので合本にして報告する。第8次調査は昭和58年度、第10次調査は昭和59年度、第11次調査は昭和60年度の発掘調査である。

発掘調査地点

第8次調査	福岡市早良区高取1丁目144, 145	面積 531.87m ²
		調査期間 昭和58年10月18日～11月11日
第10次調査	福岡市早良区高取2丁目146	面積 1,963m ²
		調査期間 昭和60年1月23日～2月14日
第11次調査	福岡市早良区高取2丁目17～46	面積 443m ²
		調査期間 昭和60年10月23日～11月9日

2. 第8次調査の組織

調査委託 高石国助

調査主体 福岡市教育委員会

調査責任 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

庶務担当 岡嶋洋一

調査担当 田中寿夫

調査作業 中山章, 合屋龍介, 松本政道, 村木健二, 崎田英敏, 古川雅邦, 川田久子,
合屋文子, 岩本悦子, 国末睦, 山崎澄子, 佐藤ヒサエ, 吉川タエ, 島田マリ子

3. 第10次調査の組織

調査委託 川田工業株式会社 (川田忠樹社長)

調査主体 福岡市教育委員会

調査責任 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

庶務担当 岡嶋洋一

調査担当 井沢洋一, 米倉秀紀

調査補助 谷沢仁, 宮田昌之

整理補助 池田洋子, 深堀博子

調査・整理作業 松尾和雄, 合屋龍介, 高浜謙一, 蜂須賀六三, 吉村哲美, 有富いつ子,
板倉文子, 内尾トミ子, 褚方マサヨ, 金子由理子, 清原ユリ子, 後藤ミサヲ,
佐藤テル子, 坂口フミ子, 柴田幸子, 庄野崎ヒデ子, 土斐崎初栄, 中村千里,
西尾たつよ, 平井和子, 日野良子, 堀川ヒロ子, 松尾玲子, 松井フユ子,
宮原邦江, 松下節子, 吉岡田鶴子, 吉田祝子, 永井和子 仲前智江子

4. 第11次調査の組織

調査委託 吉祥開発株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査責任 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

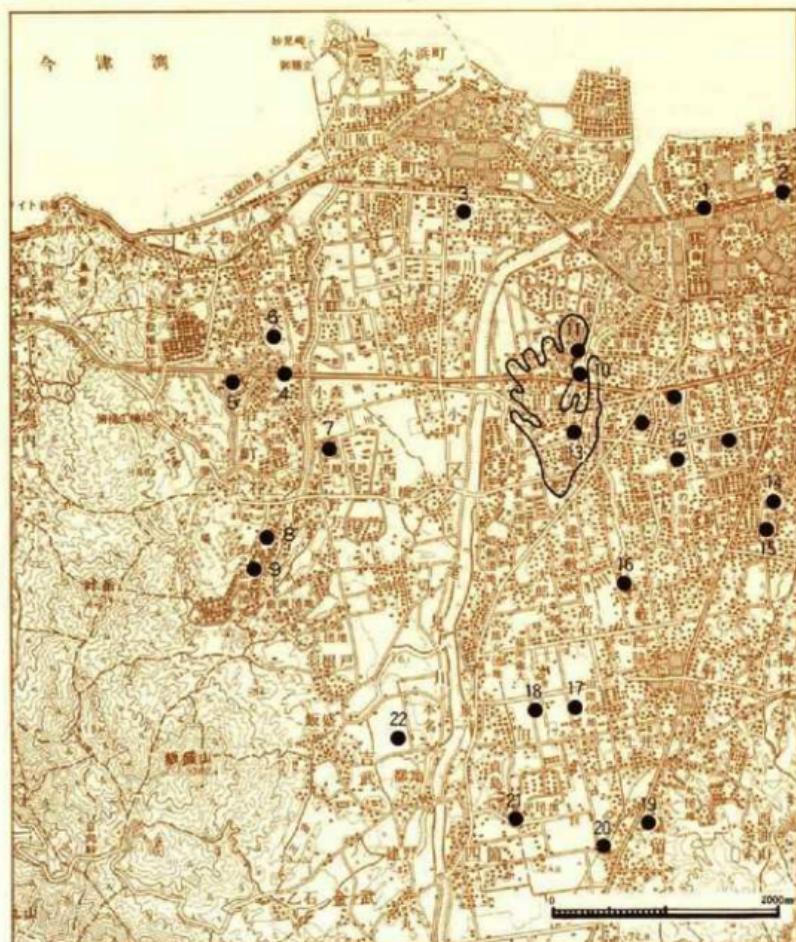
庶務担当 岸田隆

調査担当 山崎龍雄, 米倉秀紀

調査補助 谷沢仁

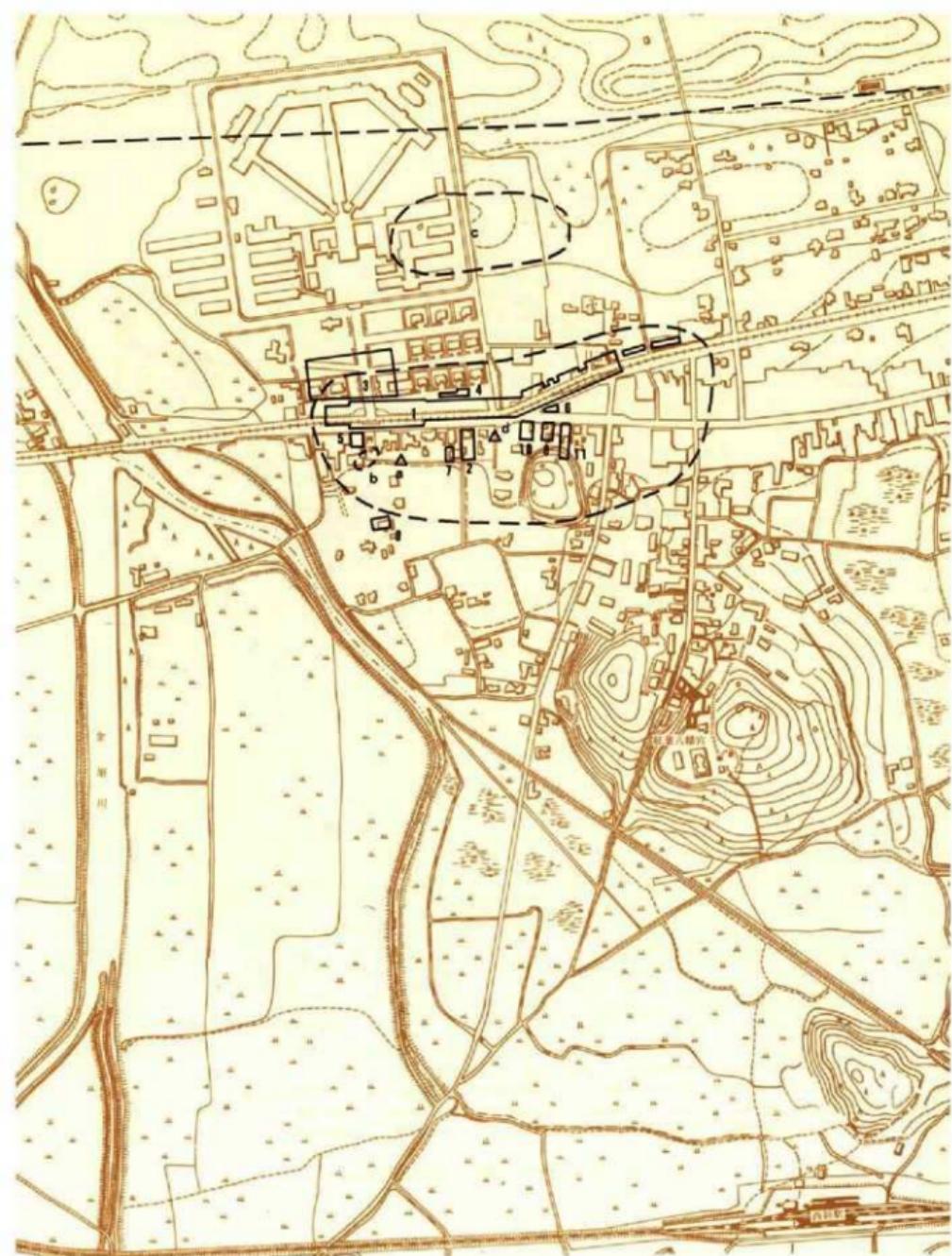
整理補助 池田洋子, 深堀博子

調査・整理作業 合屋龍介, 馬場寿男, 高橋正弘, 明野隆, 深堀雅基, 柴田勝子, 金子由理子,
清原ユリ子, 坂口フミ子, 堀川ヒロ子, 松井フユ子, 門司ヒロ子, 内尾トミ子,
仲前智江子, 松下節子, 能美須賀子, 原田佳史子, 井上カツ代, 永井和子



1. 鷺崎道跡
2. 西新町道跡
3. 五島山古墳
4. 湯納道跡
5. 宮の前道跡
6. 紅六町ツイジ道跡
7. 半多田道跡
8. 野方中原道跡
9. 野方塙原道跡
10. 松浦殿塙古墳
11. 筑紫殿塙古墳
12. 原道跡
13. 有田・小田部道跡
14. 板倉原道跡
15. 千畠古墳
16. 鶴町道跡
17. 高柳道跡
18. 田村道跡
19. 重留箱式石棺墓
20. 拝塙古墳
21. 四箇道跡
22. 橘渡古墳

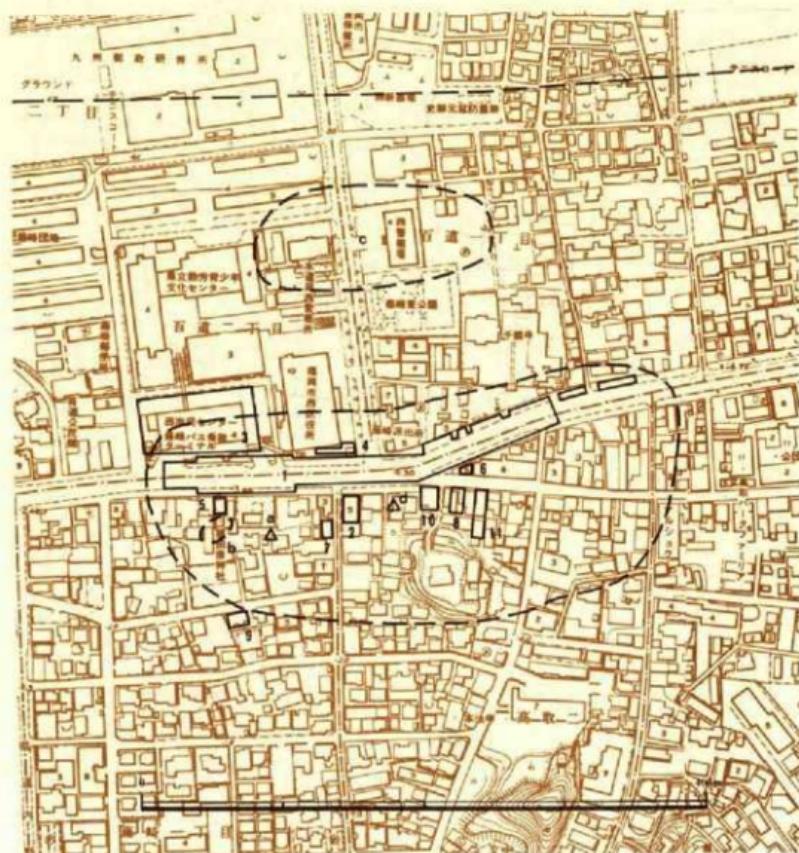
第1図 早良平野の道跡分布図(縮尺1/20,000)



第2図 藤崎遺跡周辺地形図(昭和初期頃)(縮尺3‰)



第3図 藤崎遺跡周辺地形図（縮尺 $1/5000$ ）



- a. 第1地点 (明治45年 箱式石棺出土地)
- b. 第2地点 (大正6年 昭和5年箱式石棺・覆棺墓出土地)
- c. 第3地点 (昭和33年 覆棺墓出土地—旧刑務所内遺跡)
- d. 第4地点 (昭和50年代発見地)
- 1. 第1調査
- 2. 第2次調査
- 3. 第3次調査
- 4. 第4次調査
- 5. 第5次調査
- 6. 第6次調査
- 7. 第7次調査
- 8. 第8次調査
- 9. 第9次調査
- 10. 第10次調査
- 11. 第11次調査

第4図 藤崎追跡調査地区配置図 (縮尺 $1/1000$)

Ⅱ章 遺跡の位置と環境

福岡市早良区藤崎は旧くは鳥飼神社の門前町として栄えた西新町の西端に位置する。この一帯は百道松原、袖の松原の白砂青松に恵まれ、又、この藤崎の地からは遠く糸島の小富士（可也山、標高365m）を望めるところから、富士見崎の地名が付いたともいわれている。藤崎遺跡は藤崎、高取、百道の地域に拡がり、長径約300mを測る弥生時代から古墳時代の大墓地群を形成している。藤崎遺跡の立地する古砂丘は標高5～6mを測り、博多湾の左舷海流によって鳥飼、西新、藤崎の間にわたって砂洲状に形成されたものである。砂丘後背地はタグーン状を呈し、特に砂丘の西端では室見の旧河川となるが、かつては入江を形成し、「水口、潟、汐入、浜口」などの地名を残している。藤崎遺跡を中心とした砂丘の背後には龜原山、栄山といった洪積層の独立丘が控え、これらの丘陵から派生した小丘が藤崎遺跡の東南側をさえぎっている。現在の海岸汀線は国道202号線より北へ約470mである。

早良平野における弥生時代～古墳時代初頭の遺跡については第1図に示したが、同一砂丘に立地する西新町遺跡では、弥生時代中期の斐棺墓や弥生時代終末～古墳時代終末の住居跡が検出されている。弥生時代の斐棺墓は藤崎遺跡の分村的関係を有している。弥生時代の拠点的集落としては早良平野中央の独立中位段丘上に立地する有田・小田部遺跡が知られ、この遺跡では弥生時代初頭の環濠が検出され、又、古墳時代後期まで集落が継続する。近年、多細網文鏡や青銅利器を多量に出土した吉武・高木遺跡や大石遺跡を含めた飯盛遺跡群は弥生時代～古墳時代の一人拠点集落でもある。この時代には沖積地内に集落が進出し、弥生時代初頭の鶴町遺跡^{註1}や原遺跡などが室見川の東側に所在し、集落と水田が営まれる。野方遺跡の北東には湯納遺跡^{註2}、拾六町ソイジ遺跡などの弥生時代～古墳時代の水田跡が存在する。

弥生時代～古墳時代初頭の盟主墓、又は首長墓の領域として幾つかの地域に分れることが推測できる。一つは藤崎遺跡の方形周溝墓群を中心とする。室見川の西には姫の浜の砂丘遺跡が存在し、その背後には五島山古墳がある。箱式石棺から納載の二神二獣鏡2面、銅鏡9本、鉄剣、玉類が出土している。有田・小田部を中心としては松浦殿塚や筑紫殿塚がある。拾六町から野方周辺では、野方塚原の石棺墓群や宮の前遺跡の墳丘墓がある。早良平野の東側丘陵地帯では銅剣を出土した飯倉原に近接して干隈古墳や、鳥文鏡と管玉を出土した重留の箱式石棺墓、及び拝塚古墳がある。又、早良平野の奥では早良土塚の系譜をもつ種渡の前方後円墳や飯盛谷遺跡の方形周溝墓群がある。東に目を転ずれば、樋井川流域には前方後方墳の京の隈古墳が存在し、早良平野における盟主層の成長と首長層成立への過程を推測せしめしている。

註1 福岡市教育委員会「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第37集 1976

註2 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集」 1976

註3 福岡市教育委員会「拾六町ソイジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983

註4 福岡県早良郡役所「早良郷志全」1973

Ⅲ章 調査の記録

1. 藤崎遺跡発掘調査地点の概要

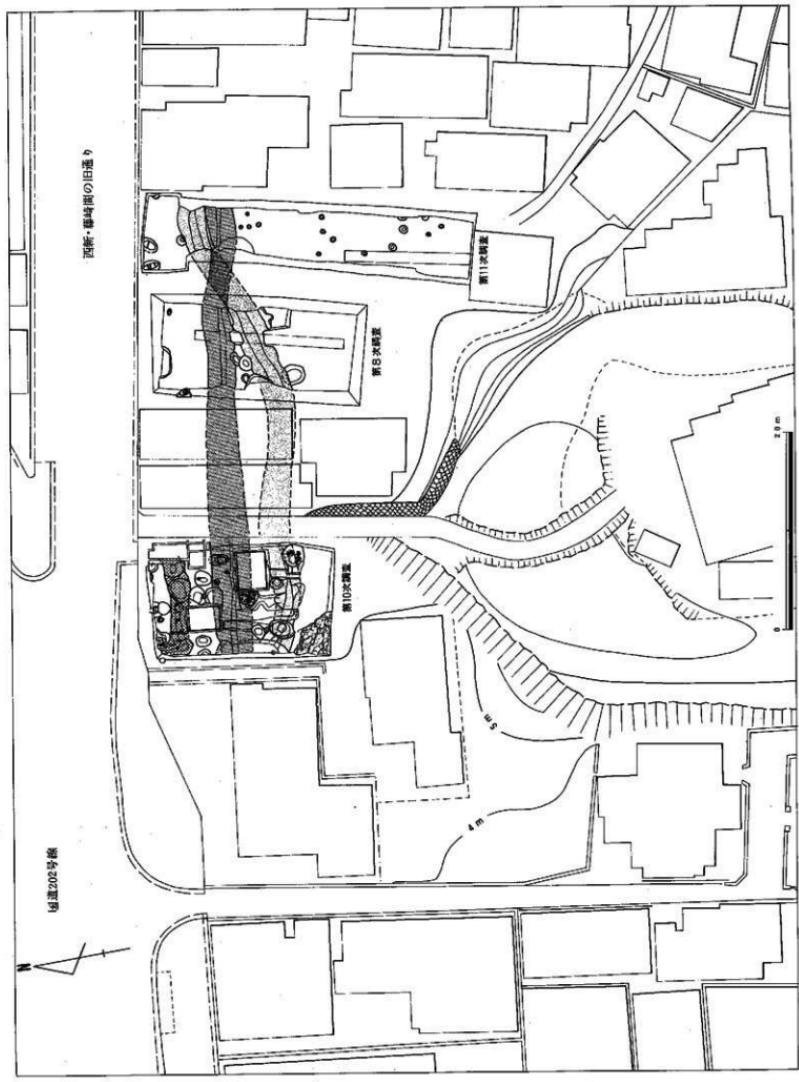
藤崎遺跡の発掘調査地点及び、明治時代以来の発見地については1982年の「藤崎遺跡」（Ⅲ章調査の記録）や1986年「藤崎遺跡Ⅱ」（Ⅲ章調査の記録）の中で詳細に整理されているので、ここでは改めて述べることは避けたい。1986年「藤崎遺跡Ⅱ」で云うように福岡市教育委員会並びに同等の組織が行った発掘調査については発掘調査次数を与え、発見地、又は採集地とは区別して取り扱うことを提示したい。よって、発見地点、及び発掘調査次数については以下の第1表のように整理したので参考にされたい。

藤崎遺跡に関する文献

- 註1 島田寅次郎「藤崎の石棺」「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」第一輯 1925
註2 中川平次郎「古文部省記述書（二）」考古学雑誌第3巻第3号 1918
註3 永倉松男、鏡山猛「筑前國藤崎に於ける赤生式遺跡」考古学雑誌第2巻第1号 1931
註4 泰貞次郎教授の御教授による、「藤崎遺跡」1982年、所収
註5 浜石哲也編「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書」藤崎遺跡 福岡市教育委員会 1981
註6 鏡山猛「要略系考（二）」史源 第55輯 1953
註7 浜石哲也編「藤崎遺跡」福岡市教育委員会 1982
註8 井沢洋一編「藤崎遺跡Ⅱ」福岡市教育委員会 1986

地点名 発見次数	旧地点名	所在地	面積	調査期間	事業名	時代	遺構	備考
第1地点	第1地点	福岡市早良区 藤崎1丁目14		昭和45年 3月19日	川庄君五郎氏宅	古墳時代	箱式石棺	三角形二重棺或 後棺内火刀
第2地点	第2地点	福岡市早良区 高取2丁目38		大正6年 昭和5年	村上研究所	弥生時代～ 古墳時代	箱式石棺・圓錐墓	方格溝文鏡
第3地点	第3地点	福岡市早良区 高取2丁目3		昭和40年代	旧附属所	弥生時代	變形墓	
第4地点	——	福岡市早良区 高取2丁目17	昭和50年	芦戸酒類	弥生時代	變形墓…1基	彩文土器(壹)	
第1次 第4地点	福岡市早良区百道 (1966年発見)	4.95ha	昭和59年4月～ 昭和60年6月	高速鉄道 (地下段)	弥生時代～ 中世	変形墓…1基 石棺墓…1基 土塁…1基 住居跡…12軒		
第2次 第5地点	福岡市早良区 高取2丁目17	4.93ha	昭和57年 昭和58年	テナントビル	弥生時代～ 中世	方格溝…1基 變形墓…1基 土塁		
第3次 第6地点	福岡市早良区 高取2丁目2-807	2.70ha	昭和59年 昭和60年	バスターーミナル	古墳時代初期 ～中期	古墳時代初期 ～中期	三角形二重石垣 火葬場…1基 火葬場…1基 土塁…1基 住居跡…7軒	彌文鏡
第4次 第7地点	福岡市早良区 高取2丁目	約143m ²	昭和60年 昭和61年	地下鉄出入口A	古墳時代初期	變形墓…1基 土塁…1基		
第5次 第8地点	福岡市早良区 藤崎1丁目1	約101m ²	昭和65年 5月29日	地下鉄出入口B	弥生時代初期	變形墓…2基 土塁…1基		
第6次	福岡市早良区 高取2丁目18	約150m ²	昭和67年12月	地下鉄出入口C	弥生時代	變形墓		
第7次	福岡市早良区 藤崎1丁目1	200m ²	昭和68年 昭和69年4月26日	監督室増築	弥生時代	變形墓…1基 土塁…1基		
第8次	福岡市早良区 高取2丁目144-145	532m ²	昭和68年 昭和69年4月26日	テナントビル	弥生時代～ 中世	火葬場…1基 土塁…1基		
第9次	福岡市早良区 藤崎1丁目2-29	244m ²	昭和68年 昭和69年4月26日	貸賃住宅	弥生時代～ 中世	火葬場…1基 土塁…1基 住居跡…1軒		
第10次	福岡市早良区 高取2丁目145地	1,969m ²	昭和68年 昭和69年4月26日	分譲住宅	弥生時代～ 中世	火葬場…1基 土塁…1基		
第11次	福岡市早良区 高取2丁目46	443m ²	昭和68年 10月23日 ～11月9日	テナントビル	弥生時代～ 中世	變形墓 墓…1基		

第5図 鶴崎漁港第8・10・11次調査地点配置図(縮尺1/500)



IV章 第8次調査

1. 調査経過の概要

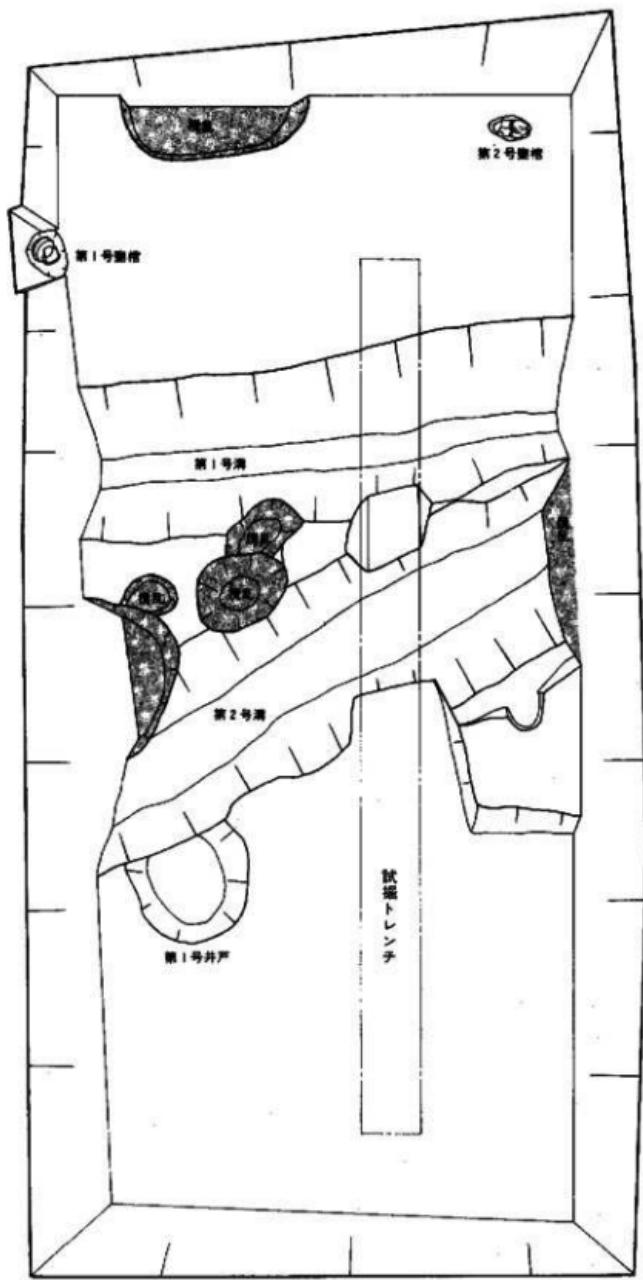
調査対象地は福岡市早良区高取2丁目144, 145番地に所在する。開発申請面積は532m²で、うち302m²について調査を実施した。

当該地は藤崎遺跡群の中央からやや東へ寄った地点に位置し、昭和57年度に調査された第6次地点とは西新商店街へ通じる旧道を挟んで、南側に対峙している。この地点は、第三紀に形成された花崗岩を基盤としている栄山、龜原山と呼ばれる独立丘陵の北端部に接する箇所にあたっており、本来はなだらかな傾斜面上に位置していたものと思われる。現況は宅地造成等で削平されており、旧地形の形状はほとんどとどめていない。調査区の東・西壁で観察された土層堆積の状況から判断すると、調査区の南側で1.5~2mほど削平されているものと思われる。また、古砂丘を形成している白っぽい明褐色砂層の堆積の在り方からみると、この地点は現在の西区役所が立地している地点を中心とする砂丘の南東部の端部にあたる箇所でもあり、当該地が地形的に何らかの変換点にあたっていたことが想像される。

昭和58年8月に福岡市教育委員会文化課へ、当該地における開発計画が提出され、それに伴って同年9月に遺跡の有無についての試掘調査を実施した。その結果、中世の溝状遺構や遺物を検出・確認したために、保存上の問題も含めて高石国助氏と協議を重ねたが、諸般の事情によりやむを得ず本調査を実施することとなった。

調査対象地の基本十層は、上層から第1層；表上層（現代と明治初期の整地層に2分できる。層厚30~50cm）、第2層；暗灰褐色砂層（層厚30~40cm）、第3層；灰褐色～褐色砂層（層厚約20cm）、第4層；淡い灰褐色砂層（層厚約20cm）、第5層；白っぽい明褐色砂層（砂丘の基盤となる粗砂層）である。調査区南端部では、第2層と第3層との間に赤褐色の粘質土が約20~30cmほどの厚さに二次堆積している状況がみられた。これは後述する2号溝の南壁までを北限とし、さらに東側に広がっている。第5層は北側にゆくにつれて徐々に高くなってしまい、南端部と北端部では0.5~0.7mの比高差がある。遺構の検出面は第3層上面であるが、北端部では第2~4層は消滅し、表土層直下に第5層がみられた。2基の甕棺墓はこの第5層上面にて検出した。調査区は全体的に明治時代以降の擾乱が著しく、遺構の遺存状況はあまり良好なものではなかった。

検出した遺構と遺物は弥生時代中期の甕棺墓2基、中世の井戸1基、溝状遺構2条である。それぞれの遺構、及び土層から弥生時代～中世にかけての土器、陶磁器が出土している。なお、これらの遺構と遺物は調査区の中央部から北側にかけて分布しており、藤崎遺跡の遺構分布の存り方を考える上で、一つの傍証となるものと思われる。



第6図 藤崎遺跡第8次調査地点遺構配置図 (縮尺1/100)

2. 遺構各説

(1) 壊棺墓

1号壊棺(第7図、図版3)

調査区の西様の北端部で検出された。現地表面から約-60cmの面までは擾乱されており、本来の壊棺墓壙の上半分は消滅している。したがって、墓壙の平面形や、棺の組み合せについては不明確である。

墓壙は北西方向に斜めに掘り下げられ、墓壙内には、主軸がN-54°-Wの方向で、水平に対して伏角47°40'の角度をもって、大型の壺形土器を埋置している。壺の側部下端には、直径4cmの穿孔がみられる。棺内及び、墓壙内の覆土は暗褐色砂質土で、棺の内外ともに遺物はみられなかった。

2号壊棺(第7図、図版3)

調査区の北東部で検出された、合口式の小児用壊棺である。墓壙は、平面形か椭円形で、東西に長軸方向を持ち、底面はほぼ水平に掘削されている。墓壙内、及び棺内の覆土は淡灰褐色砂質土で、第4層によく似ている。壊棺は主軸N-17°-Wの方向にとり、水平に対して伏角6°の角度で墓壙内に埋置している。

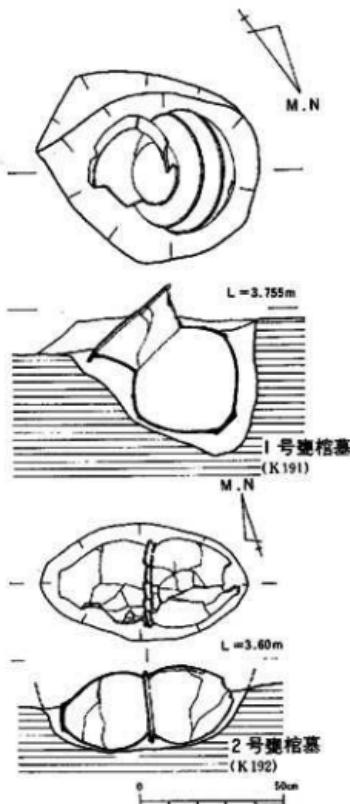
(2) 溝

1号溝(第8図、図版3、4)

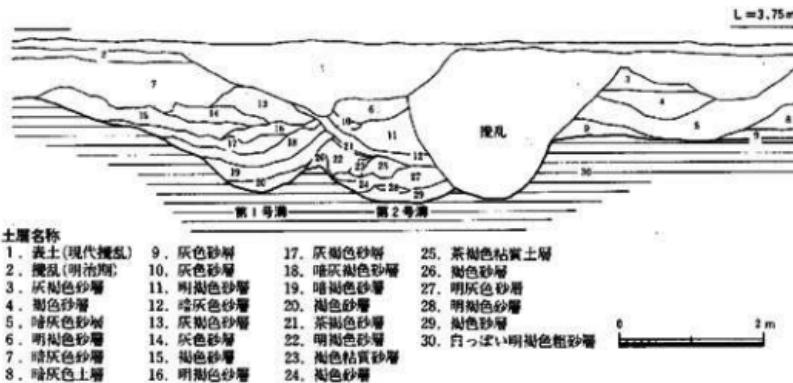
調査区の中央部よりもやや北側にかけて検出された。東西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面形は逆台形で、最大幅2.80m、深さ1.00~1.20m、基底面幅約0.50mを測る。東壁の十層断面での観察では、第2号溝の埋没後に削削されたもので、また、この溝の埋没後、平面的には確認できなかったが、浅い土壤ないし溝状の遺構で南壁が削平されていることがわかった。

2号溝(第8図、図版3、4)

調査区のほぼ中央部に検出された溝状遺構で、北東から南西へかけて、若干の弧を描いて延びている。断面はかなり上端部が開いたU字形で、最大幅3.00m、基底面幅0.8~1.0m、深さ約0.50~0.70mを測る。東壁の十層堆積の状況からみると、深さは1.20m前後であったものと思われる。



第7図 1号・2号壊棺出土状況図(縮尺1/20)



第8図 調査区東壁断面土層図(1号・2号溝切り合ひ部分)(縮尺1/80)

(3) 井 戸

1号井戸 (第9図、図版3)

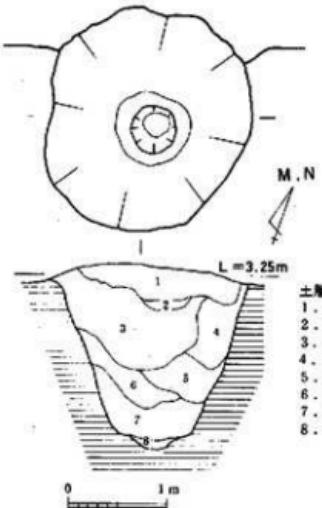
調査区南西部で、第2号溝に接して検出された素掘りの井戸である。上部は第2号溝によってかなり削平を受けているものの遺存状況は良好であった。平面形はやや不整な円形で長径2.28m、短径2.0m、深さ1.85mを測る。断面形は除々にすぼまって基底部へと続き、基底面中央には、直径が約0.5mほどで、深さ0.2mの浅い凹がみられる。現在の湧水レベルは、この凹の上端部にあたり、湧水量が多い。井戸桶等が掘え置かれていたものと思われる。覆土の堆積状況からみると、一時的に埋め戻されたものと思われる。

3. 遺物各説

(1) 壱 棺

1号壱棺 (第10図、図版4)

棺として用いられた土器は、器高47.2cm、口縁部外径39.6cm、内径30.6cm、胴部最大径41.1cmを測る。口縁部がいわゆる鋸先口縁の、大型の壱形土器である。胴部最大径は、中位よりやや上にあり、その部位と肩部の中位に、断面形がコの字形の突帯を

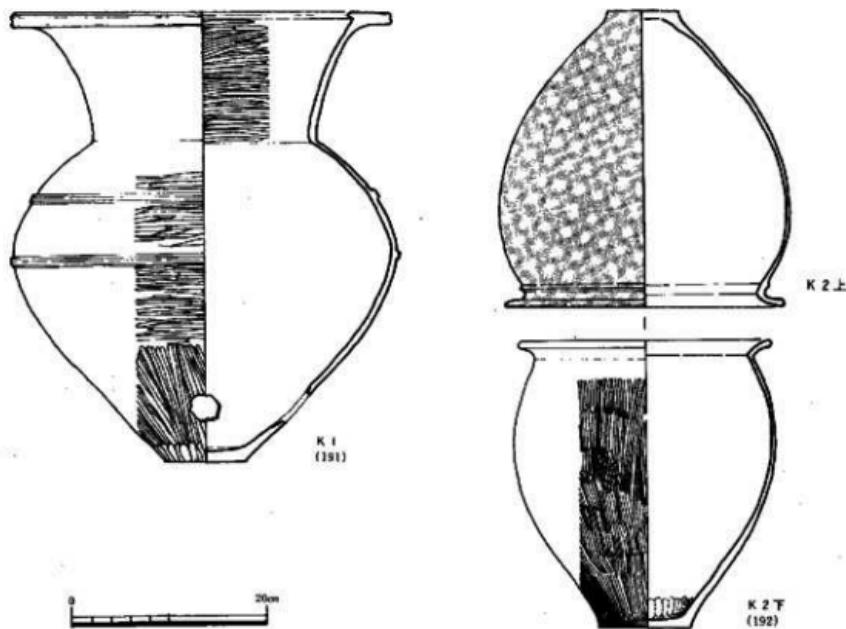


第9図 1号井戸平面図、及び断面上層図(縮尺1/60)

貼付し、巡らしている。胴部の外面及び頸部の内側には、丁寧なヘラミガキによる成形がなされ、胎土、焼成ともに良好である。色調は全体的にくすんだ灰褐色を呈している。形態的な特徴から弥生時代中期中葉の所産かと思われる。

2号甕棺（第10図、図版4）

棺に用いられた上蓋は、上、下蓋いずれも小型の變形土器で、胴部がやや張った泡弾形の器形を有し、口縁部の断面形がくの字形に外反する特徴を持つ。上蓋は口縁部直下に断面三角形の突起がみられ、赤色顔料を塗布した後、ヘラによる丁寧な横方向の研磨を施している。口縁部外径は29.5cm、内径23.6cm、器高31.2cm、胴部最大径30.6cmを測る。下蓋は口縁部外径26.4cm、内径20.7cm、器高30.4cm、胴部最大径27.4cmで、上蓋よりもやや小ぶりである。口縁部は上蓋より弱く外反するが、その内面の稜線は明確で、断面形がよりくの字形に近くなっている。外面は縦方向のやや目の粗い8～10条を単位とするハケ目調整が施されている。弥生時代中期の後半～末にかけての所産かと思われる。



第10図 1号・2号甕棺（縮尺1/6）

(2) 第1号溝出土遺物(図版5-26)

出土した土器はきわめて少なく、正確な時期比定の目安となる遺物はない。基底面から、大形成人斐棺の破片(図版5-26)が、第16~17層にかけて中世土師皿小破片(糸切り底)が出土している。

(3) 第2号溝出土遺物(第11図、図版5)

遺物は第25~27層にかけて主に出土したが、量は少ない。

弥生式土器

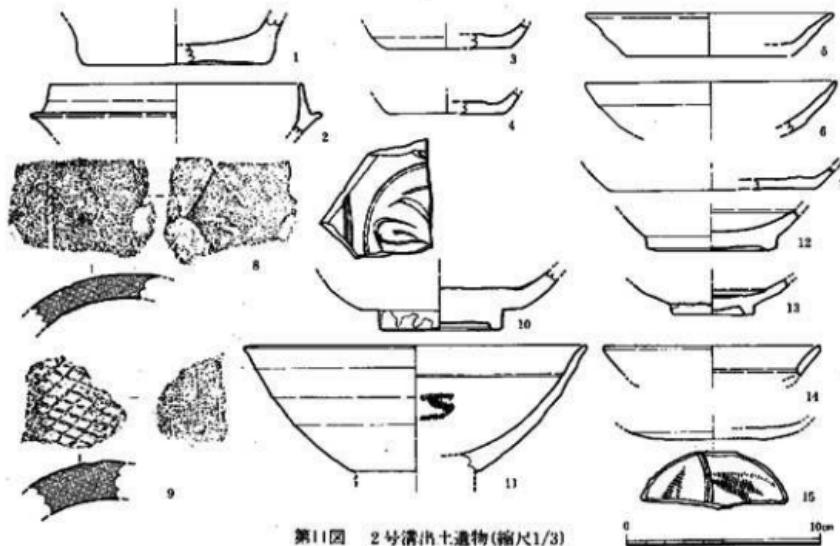
変形土器(1) 斐底部破片である。胎土、焼成ともによくなく、空隙が目立つ。

須恵器

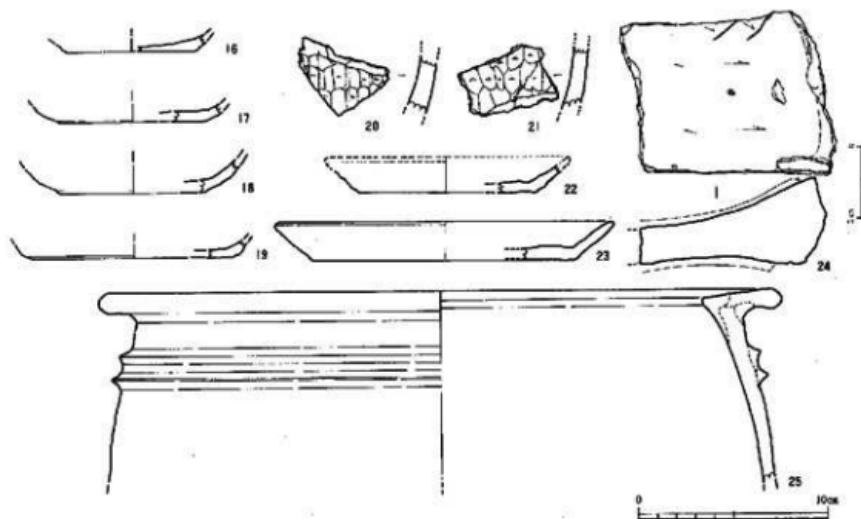
环身(2) 环身の破片である。口径12.8cmで、胎土、焼成良好。全体的に磨耗している。

土師器

皿(3, 4, 16) 5~7, 17~19は上師器で、すべて糸切り底である。3・4はやや厚手の底部から内面気泡に体部が立ち上がる。16は薄手の底部で、器高が低く平たい形態をなすものと思われる。復元底径は、6.0~6.5cmで、口径及び器高は3・4が8.5~8.7cmと1.3~1.5cmで、16が8.3cm前後と1.2cmほどと推定される。



第11図 2号溝出土遺物(縮尺1/3)



第12図 2号溝、及びその他の出土遺物実測図(24は縮尺1/4、他は1/3)

坪(5~7, 17~19) 5・6・17・18は、7・19と比べやや器高が高いもので、復元口径は12.3~13.0cm、器高2.0~2.8cm、底径7.5~8.5cmにおさまる。7・9は底径10.4cmで、口径は13.5cm前後で、器高は2.5cmほどと推定される。これらの上部器はいずれも胎土精良で、焼きもよい。

瓦類

丸瓦(8, 9) 丸瓦の破片である。8は厚さ約1.4cmで、縄叩き目をナデ成形により、擦り消している。9は斜格子の叩き目を残すもので、8と同様部分的に擦り消している。いずれも裏面には布目瓦裏がみられ、くすんだ灰褐色を呈す。

青磁

碗(10) 碗の破片で、内面に草花文を施している。釉調は透明度の高い青緑色。

皿(14, 15) 平皿で、櫛描文を施すもの。15は全面施釉の後、外面底部を削り露胎としている。

白磁

碗(11, 12) 11は内面に櫛目による浅い花文様を施すもので、口縁部下には沈線を巡らしている。釉は薄く、透明度の高い灰白色。復元口径17.2cm。12は玉縁口縁を有する碗の底部で、内底見込みに沈線を廻らす。

皿(13) 高台付皿で、見込み内底の釉を輪状に搔きとっている。高台部は露胎。

(4) 1号井戸出土遺物

出土遺物はきわめて少ない。糸切り底の土師器皿、もしくは壺の破片が14点出土しているが、いずれも小片のため図示し得ない。時期的には、第2号溝よりもやや先行する時期の所産かと思われる。

(5) その他の出土遺物 (第12図、図版5)

調査区の北側、及び東側の擾乱部分から出土したものうち特徴的なものを図示した。

弥生式土器

甕(25) 甕の口縁部片で、逆L字形の断面形をなし、口縁直下に2条の三角突帯を貼付している。焼成は良好。

土師器

壺(22) 土師器壺片で、復元口径は12.6cm、器高は1.9cm、底径は9.2cmを測る。糸切り底である。褐色を呈し、焼成は良好。

須恵器

壺(23) 破片である。復元口径は17.8cm、器高は2.0cmを測る。

石製品

石鍋(20、21) いすれも滑石製石鍋の胴部片である。器壁は約1.0cm厚で、器面には炭化物が付着している。

砥石(24) 硅質砂岩製である。現存長14.9cm、幅11.9cmを測る。長軸に平行して研ぎ面が形成され、中央部で折損している。

4. 小 結

試掘調査でも確認されていた1号・2号溝は藤崎遺跡の主体をなす甕棺墓域の東南端部を画する溝であろうと、調査当初は予想していたが、既述したように二つの溝は中世以降の所産であることが確認できた。甕棺墓の範囲は甕棺の出土分布からみて、調査区中央あたりが南端部であることはほぼまちがいないと思われる。2号溝の時期は人宰府史跡に於ける土師器、及び輸入陶磁器の編年を参考にすると、白磁碗IV・V類、龍泉窯系青磁碗I-2類、同安窯系青磁皿I-2類が認められる一方、口禿の白磁IV類、龍泉窯系青磁III類が認められないことと、土師器皿、及び壺の形態・法量からみて、少なくとも13世紀中葉以降の所産かと推定される。1号溝はさらにそれよりも新しい時期のものである。これらの溝はおそらく地形の変換点をなして周辺の地形をとりこんで、南側の独立丘を意識して設けられたことが予想される。

注1 横山賢次郎、森田勉「人宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 1978

V章 第10次調査

1. 調査経過の概要

福岡市早良区字高取に所在する栄川は標高約60mを測る第三紀の独立丘であるが、この丘の北西部には標高約11mを測る小丘が存在する。開発対象地はこの小丘を含んだ約1,963m²であるが、この小丘については頂部が削平を受け、現状では宅地化している。又、裾部も著しく土取りのため変更しており、この小丘及び周辺については遺構が存在しないと判断した。小丘と平坦地との比高差は約6mを測る。

昭和59年10月30日の試掘調査では北側と西側にトレンチ3本を設定した。小丘北側のトレンチNo.1・2では、第1層—約70~100cmの表土、及び搅乱層、第2層—暗褐色砂層、第3層—黄白色砂層である。黄白色砂層（地山）上面では遺構を明確に検出できるが、これらの遺構は必ずしも地山層から振り込まれた遺構ではない。No.1・No.2のトレンチの南側では小丘裾部の岩盤が露出しており、遺構は存在しない。No.3トレンチは小丘の西側に設定した。砂丘の南側傾斜面に位置する。表土は約50cmの厚さである。第2層—黒灰色土層、第3層—黒褐色砂層、第4層—暗灰色砂層、第5層—黄白色砂層である。第4層は約30cmの厚さを測り、土師皿等を含んでいるが遺構は存在しない。第5層の黄白色砂層は地山であるが遺構は検出できなかった。第5層上面までの深さは約130cmを測る。以上の結果から調査区を小丘の北側に設定した。調査対象面積は約300m²である。

遺構は上部の搅乱が著しいため、黄白色砂層上面にて検出を行なった。しかし、調査区全体の搅乱は著しく、特に地下倉庫や基礎による破損は大である。検出した遺構は弥生時代甕棺墓6基、弥生時代～古墳時代の土塚6基、井戸1基、弥生時代の溝1条、古墳時代の溝1条、中世の溝1条である。1号溝は方形周溝状に巡る溝であるが、周辺の第3次・第4次調査にて古墳時代前半頃の方形周溝墓群を検出しているので、墓域が拡大することも予想される。

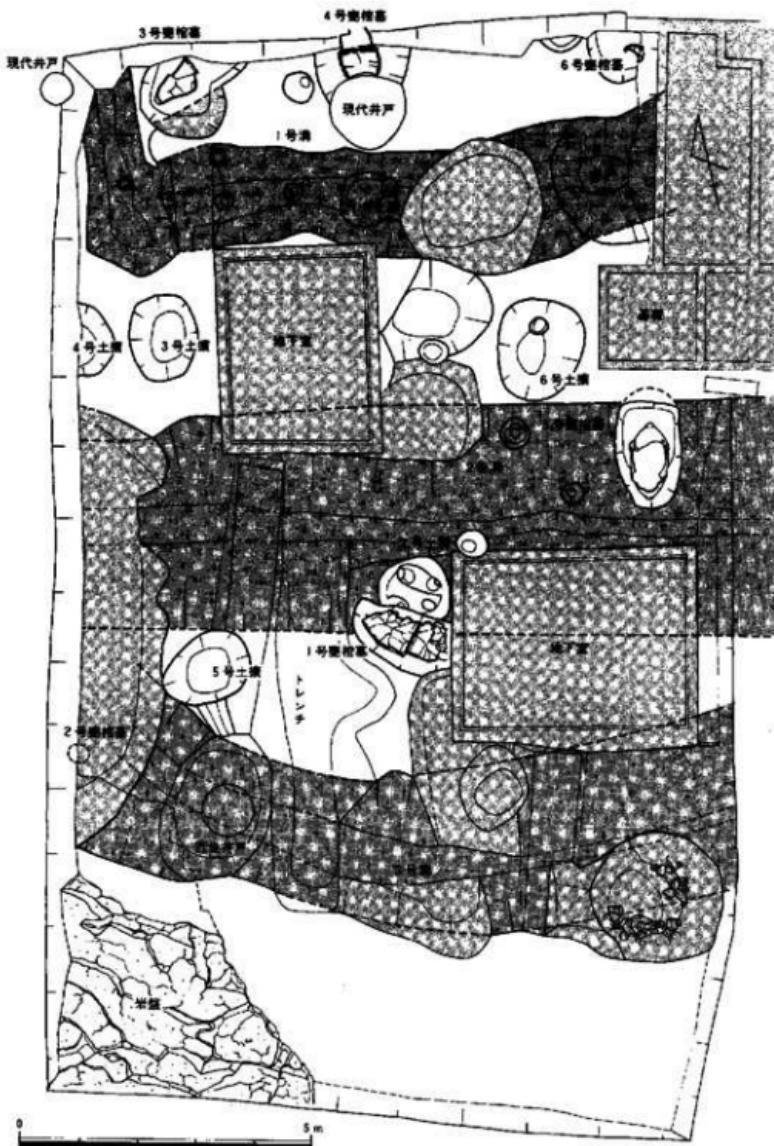
甕棺墓は墓域の南東辺に位置するものである。調査面積に対して数は少ないが、検出位置と搅乱の状況を見るかぎり、減少傾向はみられない。甕棺墓域は小丘北側の裾部まであることが判明した。

遺物は暗灰色砂層上面より鉄製刀子1本、及び黒褐色砂層より小型壺形土器1点が出土している。いずれも土塚墓副葬品と考えられるが、遺構は確認できなかった。

2. 遺構各説

(1) 甕棺墓

甕棺墓は弥生中期前葉から中葉にかけてのもので、小児棺1基、成人棺5基の計6基を検出した。いずれも後世の搅乱を受けており、残りは良くない。



第13図 第10次調査遺構配図(縮尺1/100)

1号墓棺墓（第14図、図版7）

調査区の中央部で検出した成人用の墓棺墓である。墓壙は南側を搅乱に、西側を2号土壙に削平されているため、規模・形状等は明らかでない。墓棺墓も搅乱により上蓋の胸部下半を欠損する。呑口式の墓棺墓で、上・下棺共に變形土器を用いている。棺の主軸方位はS-60°-Eで、埋置角度はほぼ水平である。

2号墓棺墓

調査区の西南部で検出した成人用の墓棺墓である。調査区の境界地にあり、且つ搅乱による破損が著しいため、墓壙等の詳細は不明である。變形土器の胸上半部が確認された。

3号墓棺墓（第14図、図版7）

調査区の北西隅で検出した成人用の墓棺墓である。墓壙の北側が調査区外であるため、形状・規模は明らかでない。単式の墓棺墓で、棺としては中型の變形土器を用いている。墓棺の主軸方位はN-59°-Eを示し、埋置角度はほぼ水平である。

4号墓棺墓（第14図、図版7）

調査区の北辺中央部で検出された成人用の墓棺墓である。墓壙の北側が調査区外であり、また南側を現代井戸により破損を受けているため、形状・規模は明らかでない。棺は呑口式の墓棺墓で、下蓋は搅乱により底部を欠損している。棺は上・下棺共に變形土器を用いている。棺の主軸方位は略南北方向を示し、埋置角度は略水平である。

5号墓棺墓（第15図、図版7）

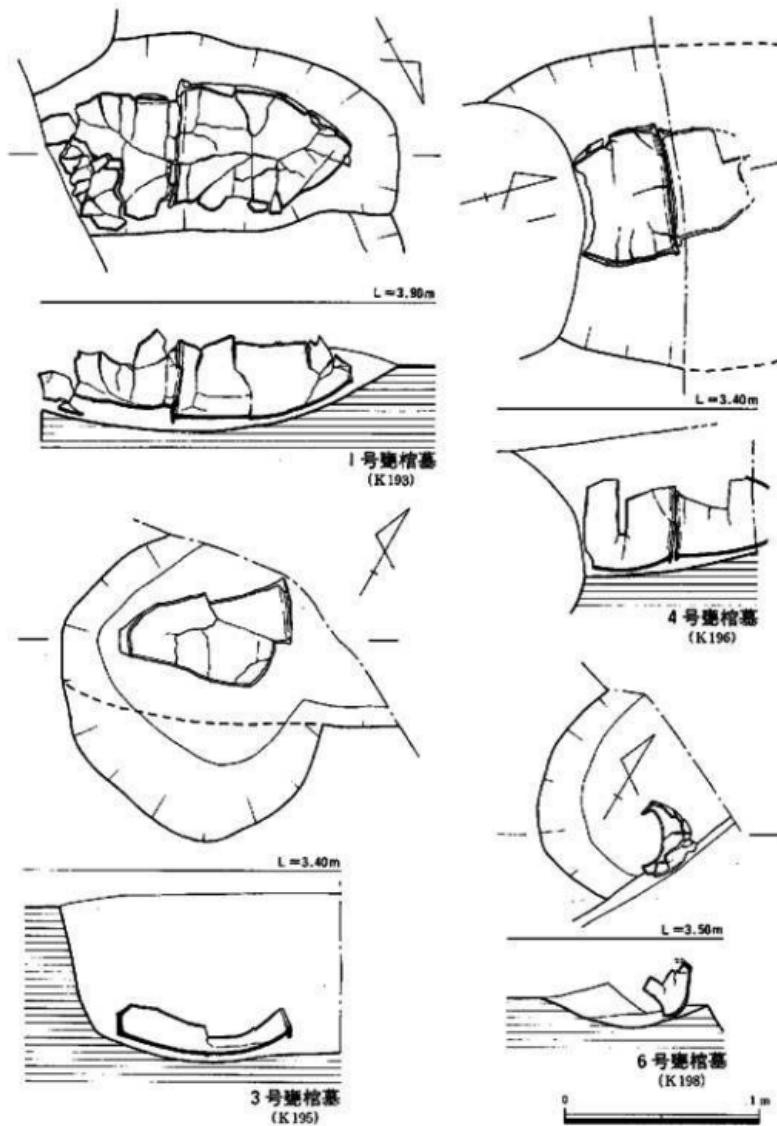
調査区の中央東寄りに位置する成人用の墓棺墓である。墓壙は2号溝のため削平されているが、長円形になるものと思われる。長軸の長さ190cm以上、短軸の長さ116cmを測る。棺は呑口式の墓棺墓で、上蓋には鉢形土器を、下蓋には變形土器を用いる。棺の主軸方位はN-13°-Eで、埋置角度は30°である。

6号墓棺墓（第14図、図版8）

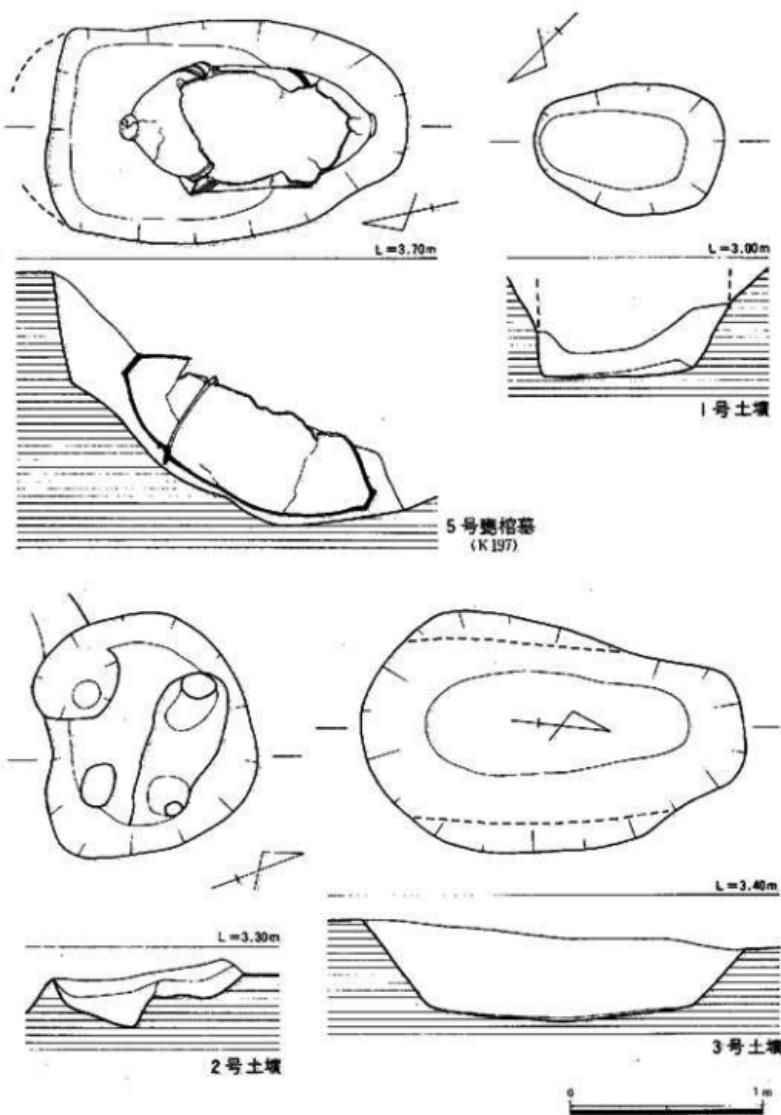
調査区の北辺、東端で検出された小児用の墓棺墓である。墓壙の東側は搅乱のため切られており、形状・規模は明らかでない。棺は呑口式の墓棺墓であったと思われるが、下蓋は抜き取られて存在しない。上蓋は口頭部を打ち欠いた変形土器を用いる。上棺の傾斜角度は50°を測るので、大きく動かされた可能性がある。主軸方位はN-60°-Eである。

第2表 第10次調査出土墓棺墓一覧表

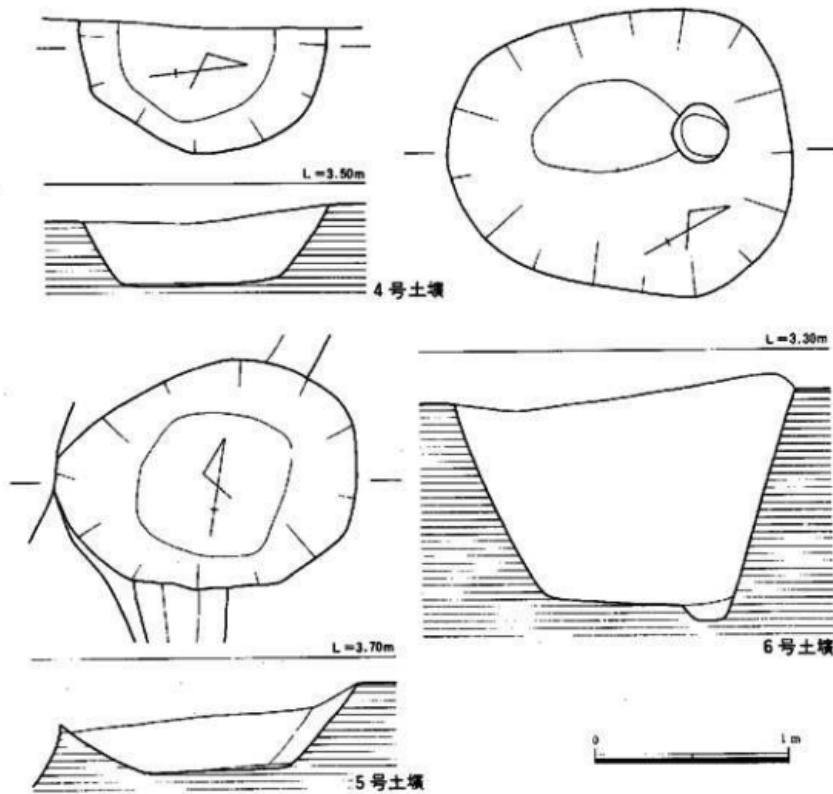
番号	方 向	傾斜角度	合計形式	組合せの形態	時 期	棺の板幅	備 考
K 1	S-60° - E	0°	呑 口	変 + 變	中期前葉	成 人	
K 2	—	—	—	變	中期後葉	成 人	調査区の東端邊界
K 3	N+59° + E	0°	单 棺	變	中期前葉	成 人	
K 4	N-2.5° - E	0°	棺 1	變 + 變	中期前葉	成 人	
K 5	N- 13° - E	30°	呑 口	鉢 + 變	中期中葉	成 人	
K 6	N- 60° - E	50°	单 棺	成	中期中葉	小 児	上蓋頭部を打ち欠き 埋葬時は四枚であったと思われる



第14圖 1号・3号・4号・6号墓 (縮尺1/30)



第15图 5号墓、1号~3号土堆(缩尺1/30)



第16図 4号～6号土壤 (縮尺1/30)

(2) 土 壤

当該の調査区では、計6基の土壤を検出した。土壤形状は橿円形、又は隔丸長方形を呈しているが、砂地のため土壤の肩が崩壊し易く、尖削図作製の時点では遺構形状が変化している場合が多く、図と説明文との間に若干の誤りが生じていることを付加しておきたい。

1号土壤 (第15図)

1号溝の東西方向部分の溝底で検出した。主軸方位はN-45°-Eを示す。上面を1号溝に削平されているが、現状面では長さ100cm、幅70cm、深さ30cmの不整円形を呈する。覆土は暗黄色砂である。出土遺物はない。

2号土壤 (第15図、図版8)

1号變棺墓の下層で検出した。覆土は暗黄灰色砂質土である。主軸方位はN-71°-Wを示す。

土壤は長さ126cm、幅106cmの不整円形を呈し、底面は起伏がある。壇底には4つのPitが存在し、径22~44cm、深さ15~20cmを測る。遺物は弥生土器片が出土した。

3号土壙（第15図、図版8）

1号溝南西側で検出した。主軸方位はほぼ南北を示す。平面形は隅丸長方形を呈していたが、崩壊のため梢円形になっている。断面形は舟底状を呈する。長さ200cm、幅120cm、深さ40cmを測る。覆土は暗黄褐色砂であるが、しまりがある。遺物は出土していない。

4号土壙（第16図、図版8）

第3号土壙の西側で検出した。境界地にあるため土壤形状及び、規模は不明である。現存長130cm、深さ30cmを測る。覆土は暗灰色砂である。遺物の出土は無い。

5号土壙（第16図）

近世井戸の北側で検出した。主軸方位はほぼ東西である。平面形は不整梢円形を呈している。上面を削平されているが、現存長156cm、幅120cm、深さ30cmを測る。覆土は黄褐色砂質上である。遺物は上層器の細片が出土した。

6号土壙（第16図、図版9）

5号斐棺墓の北西側で検出した。主軸方位は、N-30°-Eである。平面形は不整梢円形を呈しており、断面形は楔鉢状である。長さ180cm、幅150cm、深さ110cmを測る。覆土は黒褐色砂質上である。遺物は上層器片が出土している。深さから判断して井戸の機能が考えられる。

（3）井戸（第17図、土層図2）

1号溝の東端で検出した。重複しており、1号溝より古い。平面形は不整円形を呈している。上端径230cm、下端径65~80cm、深さ1.1m以上を測る。覆土は黄灰色砂に黑色砂質土のブロックを含んだ層である。遺物の出土は無い。

（4）溝

店舗、及び住宅地として永く利用されていたため、地下倉庫などの施設によって、遺構の破損が著しく、溝の検出も容易ではなかった。溝は1~3号を検出したが、幅、深さが把握できたのは1号溝のみで、他は攪乱のため正確な実数とは云えない。これらの溝の内、2号・3号溝は当該調査区の東側にある第8・11次調査検出の溝と接続するものであるが、溝の呼称が各々違っているため、以下に対称させて混乱を除きたい。

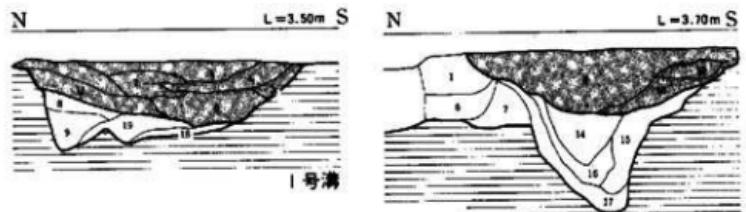
1号溝=第11次調査1号溝

2号溝=第8次調査1号溝、第11次調査2号溝

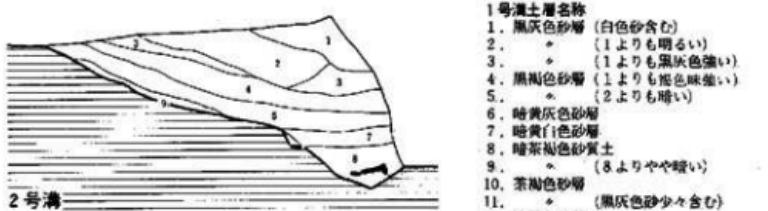
3号溝=第8次調査2号溝、第11次調査3号溝

1号溝（第17図、図版9・10）

矩形に曲がる溝で、南北方向は現存長3.3m、東西方向の現存長9.5mを測る。幅は南北方向で1m、東西方向で1.6m~1.9m、深さは東西部分で0.55m、南北部分0.45~0.7mを測る。溝



N L = 3.90m S
1号溝東壁



N L = 4.10m S
2号溝東壁

- 3号溝土層名稱
 1. 黒褐色砂質土
 2. 淡灰紫褐色砂質土 (黒灰色砂混じる)
 3. *
 4. 暗赤黃褐色砂質土
 5. 暗紫褐色砂質土
 6. 暗黃色砂質土
 7. 暗赤黃色砂質土

N L = 3.70m S
3号溝



0 1 m

- 1号溝土層名稱
 1. 黒灰色砂層 (白色砂含む)
 2. * (1よりも明るい)
 3. * (1よりも黒灰色強い)
 4. 黒褐色砂層 (1よりも褐色味強い)
 5. * (2よりも暗い)
 6. 暗黄灰色砂層
 7. 暗黄白色砂層
 8. 暗茶褐色砂質土
 9. * (8よりやや暗い)
 10. 茶褐色砂層
 11. * (黒灰色砂少々含む)
 12. 淡黑色砂層
 13. * (本褐色の焼土混入)
 14. * (黄白色砂のブロックを含む)
 15. * (黄白色砂のブロック多い)
 16. * (黄白色砂のブロックわずかに含む)
 17. 黄白色砂層 (黒色砂のブロックを含む)
 18. 淡黄白色砂層
 19. 白色砂層 (淡灰色のブロックを含む)

- 2号溝土層名稱
 1. 暗赤褐色砂質土
 2. 赤褐色砂質土
 3. 暗紫褐色砂質土 (1より暗い)
 4. やや赤味を帯びた黒褐色砂質土
 5. 黑褐色砂質土
 6. * (5よりやや白い)
 7. * (5より大いに白い)
 8. 黑褐色砂質土 (1色砂混じる)
 9. 黄白色砂質土 (所々に黒灰色砂混じる)

第17図 1号～3号溝断面上層図(縮尺1/40)

断面形は東西側は二段のV字形に近く、南北方向は箱型研堀を呈する。東西方向の溝底には径30cm、深さ22~38cmを測るPitが東から165cmと120cmの間隔で3個存在する。又、溝東西方向の西端には上端の幅30cm、下端の幅1.3m、高さ0.38mの陸橋が設けられる。覆土は黒褐色砂層、又はやや茶色を帯びた黑色砂層で構成される。北側が道路のため不明であるが、これらの条件からこの溝は方形周溝状に巡ることが予想される。

調査区の北西には第3次・4次調査が実施され、古墳時代前半の方形周溝墓が検出されており、10号方形周溝墓との距離は約50mにある。よって、当該調査区においても方形周溝墓の墓石性は充分である。

2号溝（第17図、図版9、10）

東西方向の溝である。地下室や搅乱壌のため破損著しく、正確な幅は不明である。5号甕棺墓を切って作られている。現存の溝幅は2.6m、深さ1.2mを測る。溝断面形は幅広のV字形を呈している。覆土の上層は暗い褐色系の砂質土で、下層には黒褐色砂層、暗灰色層が存在する。

遺物は土に下層から底面にかけて出土し、弥生時代中期前半~後期の甕、甕を出土している。時期については最も新しい遺物で判断すれば、弥生時代中期後半と考えたい。但し、第8次・11次調査では土師皿等も出土しており、上層からの出土であるので、溝の埋った時代は13世紀後半が妥当である。

3号溝（第17図、図版9、10）

調査区の南側で検出した東西方向の溝である。この地域は裏山の裾部が露出しており、山裾を巡って弧形状に走る。溝の南肩一部は露岩を削って作られていると判断される。2号溝同様に搅乱による破損は著しい。現存の溝幅は2.8m、深さ0.8mを測る。覆土は第1層-焼土を多く含んだ黒褐色砂質土である。他は暗褐色系の砂質土である。

遺物は下層より弥生土器片、及びタコ壺が出土している。藤崎遺跡、西新町遺跡、有田遺跡等でもタコ壺の出土はあるがいずれも古墳時代に入つてからである。タコ壺によって溝の時代を推定すれば古墳時代前半が妥当であろう。

3. 遺物各説

(1) 甕棺墓

1号甕棺（第18図、図版11）

上甕、底部を欠損している。口径58.5cm、現存高70cmを測る。口縁部は外傾するT字口縁で、内側への張りが強い。胴部最大径は器体中位にあり、頸部でやや内側へすぼまる。胴部中位に小さめの三角突帯を一条貼付する。口縁、突帯部は横ナデ調整で、内面はナデ調整を施す。外面はハケメ後ナデ調整で、突帯の上下にハケメを残している。胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈する。

下堀 底部を欠損している。口径は72cm、現存器高は90.5cmを測る。外傾するT字口縁で、内側への張りが強い。頸部は直線的に立ち上がり、胴部最大径は口縁下にある。胴部下位に三角突帯を二条貼付する。口縁部と突帯部はヨコナデ調整で、その他はナデ調整である。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈する。

2号堀棺（第18図、図版11）

口頭部を残すのみである。口径は65.2cm、現存器高は21.5cmを測る。内傾する逆L字口縁を持ち、口縁下に小さい三角突帯を一条貼付する。口縁部と突帯部はヨコナデ、他はナデ調整である。胎土は砂粒を含み、赤褐色を呈する。

3号堀棺（第18図、図版12）

口径は57.2cm、器高は84cmを測る。水平なT字口縁で、内側への張りが強い。胴部最大径は胴上半部に有り、頸部はわずかにすぼまる。胴部中位に小さい三角突帯を一条貼付する。底部は上げ底をなす。調整は口縁部と突帯部はヨコナデ調整で、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈する。

4号堀棺（第19図、図版11）

上堀 口径は56cm、器高は65cmを測る。水平なT字口縁で、外側への張りがやや強い。胴部最大径は上半部に有り、頸部はやすぼまる。胴部中位に三角突帯を一条貼付する。底部は上げ底である。調整は口縁部と突帯部はヨコナデ調整で、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈する。

下堀 胴部下半を欠損する。口径は60.5cm、現存器高は47cmを測る。水平なT字口縁で、外側への張りがやや強い。最大径は胴上半部にあり、頸部は内側にすぼまる。全体的に丸味を持った器形になる。胴部中位に小さく鋭い三角突帯を一条貼付する。調整は口縁部と突帯部はヨコナデ調整で、他はナデ調整である。細砂粒を含み、赤褐色を呈する。

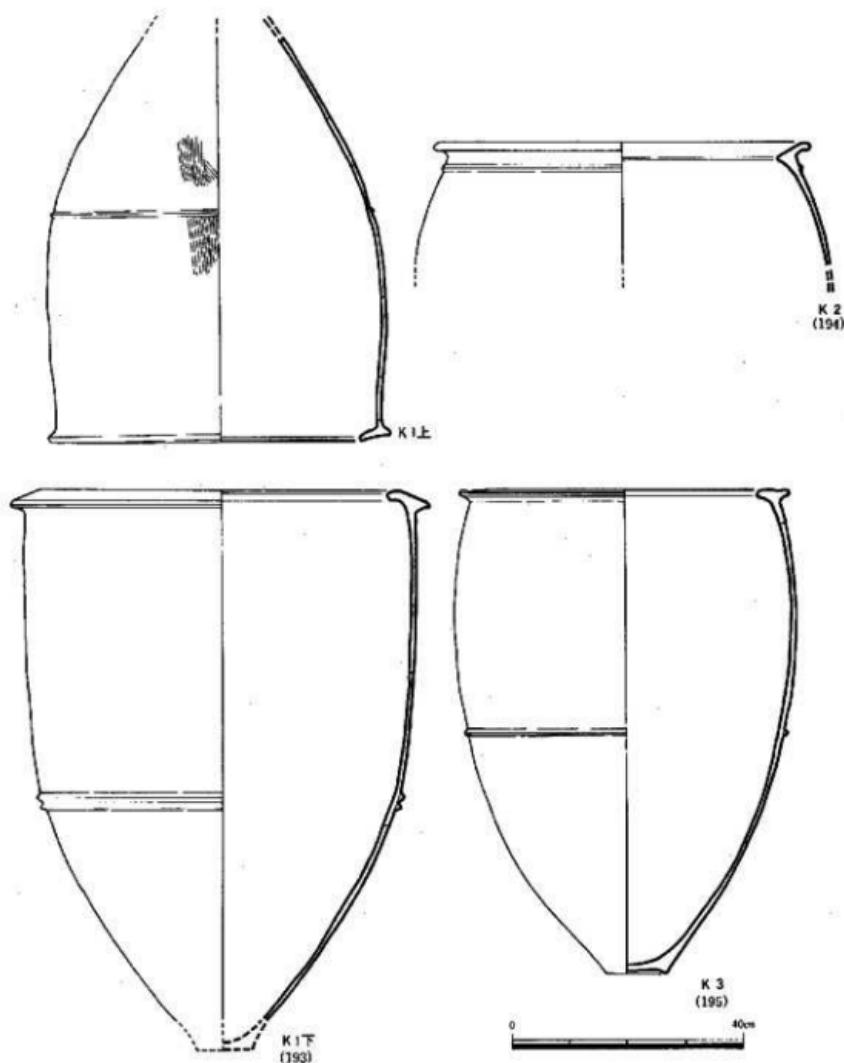
5号堀棺（第19図、図版12）

上堀 鉢形土器で、口径は57cm、器高は42.5cmを測る。外傾する逆L字口縁で、内側に少し張る。頸部下に三角突帯を一条貼付する。底部はやや上げ底気味である。口縁部と突帯部はヨコナデ調整で、他はナデ調整である。砂粒を含み、赤褐色を呈する。

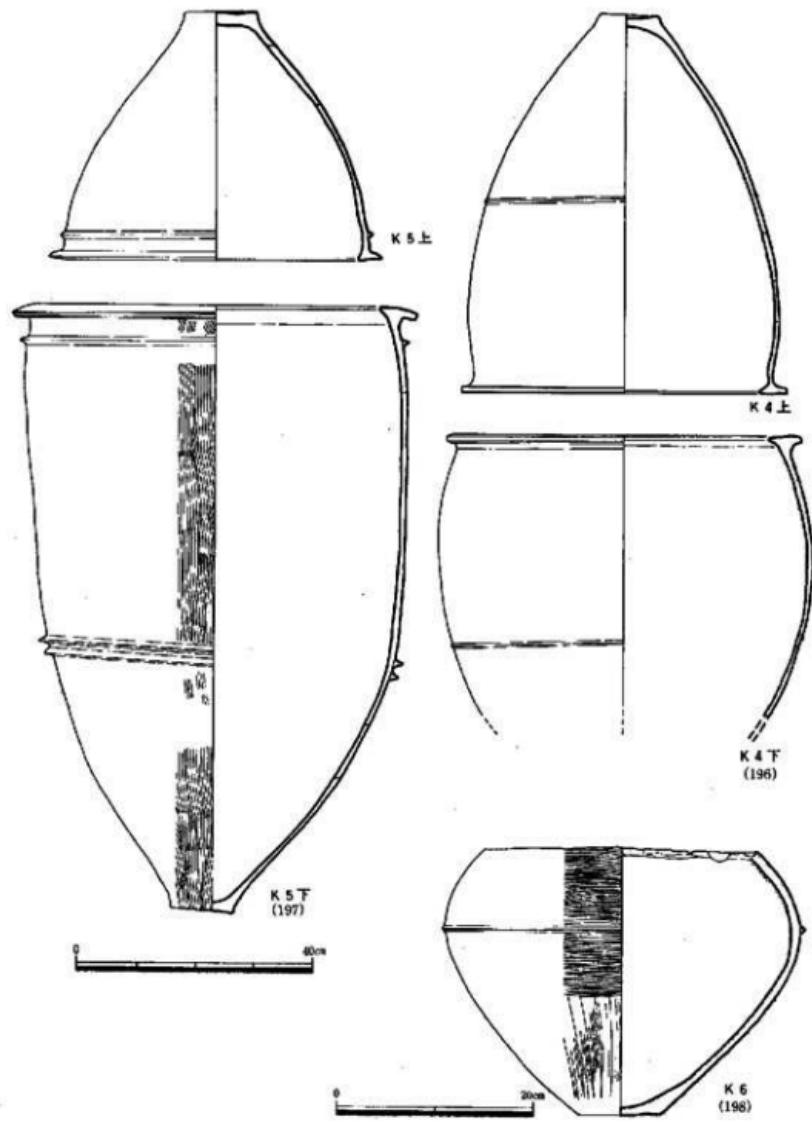
下堀 口径は70cm、器高は105cmを測る。外傾するT字口縁で、外側への張りが強い。砲弾形を呈し、胴部から頸部へは直線的に立ち上がる。三角突帯を口縁下に一条、胴部中位下に二条貼付する。口縁部突帯はヨコナデ調整で、外面にはハケメ調整を施す。細砂粒を含み、黄褐色を呈する。

6号堀棺（第19図、図版12）

壺形土器で、口頭部を打ち欠いている。現存器高は27.5cm、最大径36.4cmを測る。胴部中位に小さく鋭い三角突帯一条を貼付する。胴部上半は横方向のヘラ巻き、下半は縦方向のナデ調整である。胎土は精良で、赤褐色を呈する。



第18図 1号～3号費棺(縮尺1/10)



第19図 4号～6号墓棺 (縮尺1/10, 1/6)

(2) 1号溝出土遺物 (第20図、図版13)

弥生式土器

壺形土器（1、3） 断面形が逆L字状を呈する口縁部片である。復元口径は29.6cmを測る。胴部と口縁部の接合部は両面ともやや凹む。胴部外面はタテハケ、内面はていねいなナデを施している。3は復元口径16.5cmを測る。口縁部はくの字形を呈し、口縁部先端は丸味を帯びている。口縁部は両面ともヨコナデ、胴部は外面がタテハケ、内面はナデである。1・3とともに淡赤褐色を呈し、胎土に雲母、石英等を含む。

壺形土器（2） 断面形が略T字形を呈し、復元口径は22cmを測る口縁部片である。口縁端部の上下にヘラ状工具による刻目を施す。外面はタテ方向のヘラミガキを、内面はヨコ方向の磨きに近いヘラナデで仕上げている。

(3) 2号溝出土遺物 (第20図、図版13)

弥生式土器

壺形土器（5） 断面形が逆L字形を呈する口縁部片で、口縁部直下に断面三角形の突帯を一条貼りついている。外面にタテハケ調整を施している。

壺形土器（4） 復元口径は28.5cmを測る。器壁が厚く、約1cm程である。断面形は略T字形を呈するが、メリハリがない。また口縁端部には刻目を施している。外面は摩滅のため調整法はよくわからないが、両面ともナデ仕上げであるものと思われる。胎土には大粒の長石、石英等を混入し、粗い。

高杯形土器（6） 底径27.5cmを測る底部片である。かなり急激に立ち上がるが、その後ゆるやかなカーブを描く長い脚部を有するものと思われる。脚部端部に一条の沈線を巡らしている。外面は粗いタテハケ、内面はヨコハケとナデ調整を施している。

(4) 3号溝出土遺物 (第20図、図版13)

弥生式土器

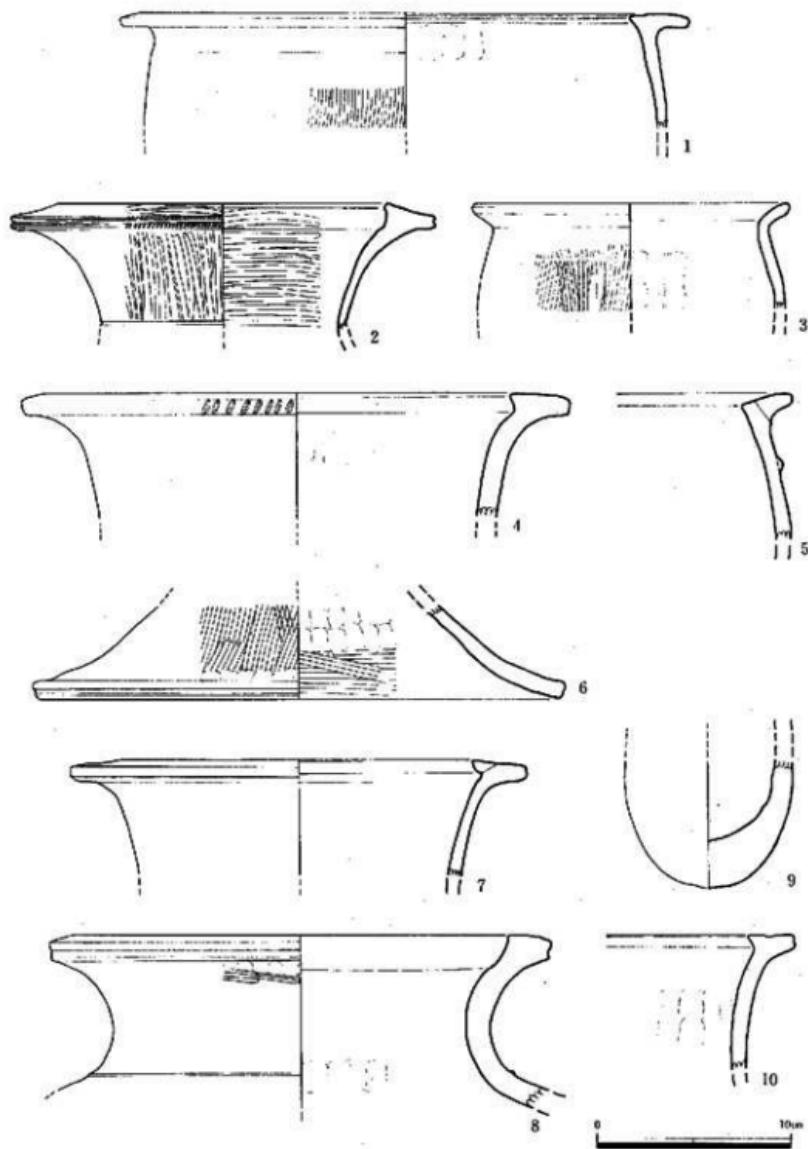
壺形土器（7） 断面形がT字状を呈し、口径は23.6cmを測る口縁部片である。口唇部中央はやや深んでいる。また口縁部内面は粘土上の接合部を指圧調整しているため、沈線状に陥んでいる。両面ともにナデ仕上げである。色調は黄褐色である。

土製品

鉗蓋（9） 現存の洞部径は8.8cmを測る。底部片である。底部の厚さは2.5cmを測る。両面ともナデ調整を施している。胎土はやや粗い。古墳時代の遺物である。

(5) 扰乱、包含層出土遺物 (第20~23図、図版13)

弥生式土器



第20图 2号·3号溝、包含層出土遺物(縮尺1/3)

變形土器 (11) 推定復元口径は24cmを測る。逆L字状口縁を持つ土器片である。口縁直下に一条、胴部中央に二条の突帯を持ち、突帯を接合する際の押圧痕として、突帯の中央に沈線がそれぞれ一条施されている。両面とも丁寧なナデ仕上げであるが、内面はわずかに指頭痕が確認できる。外面、及び口唇部には丹を塗っている。

変形土器 (8) 復元口径は26cmを測る。口縁部断面形はT字形に近い形を示すが、口唇部の幅はかなりせまい。器壁が厚く、もっとも厚い所で1.5cmを測る。また肩部には一条の断面三角形の突脊を貼りついている。両面ともナデを施している。

小壺 (17) 地下室コンクリート壁と石垣との間で発見した。黒褐色砂質土の包含層から出土しており、土壌墓内副葬品の可能性をもつていて。口径7.7cm、器高6.6cm、底径3.4cmを測る。口縁部は外反し、内面に綾を有しているが、頸部の器壇が厚いため外面では断面“コの字形”的突帯状としている。体部下位の開きは強く、上位は丸味をもつものの直線約で傾斜をもたない。体部上位と下位との境には山形の突帯を貼り付ける。そのため体部下位は珠算玉状を呈する。底部は小さく上部底である。頸部内面から外底部までヘラ研磨を施す。内面はナデ調整である。体部下位には焼成後の穿孔がある。径は1.7cmを測る。胎土は精良で、微砂を含む。頸部内面から外面は黒色を呈している。カーボンによるものと思われる。胎土は黄褐色である。

鉢形土器 (12) 復元口径16.5cm、推測器高約9cmを測る。全形は堀形を呈すると思われる。外面ヨコナデ、内面は指頭による荒いナデである。

土師器

皿 (13) 口径7.8cmで、底径は5.5cmを測る。底部には回転糸切り痕が残り、板目痕はない。両面ともヨコナデ整形する。胎土は精良で、焼成も良い。

須恵器

碗 (14) 弦径9.8cmを測る高台付碗である。高台は高さ5mmで、外に開いている。外面は青灰色で、内面は暗黄褐色がかっており、焼成はやや甘い。

土製品

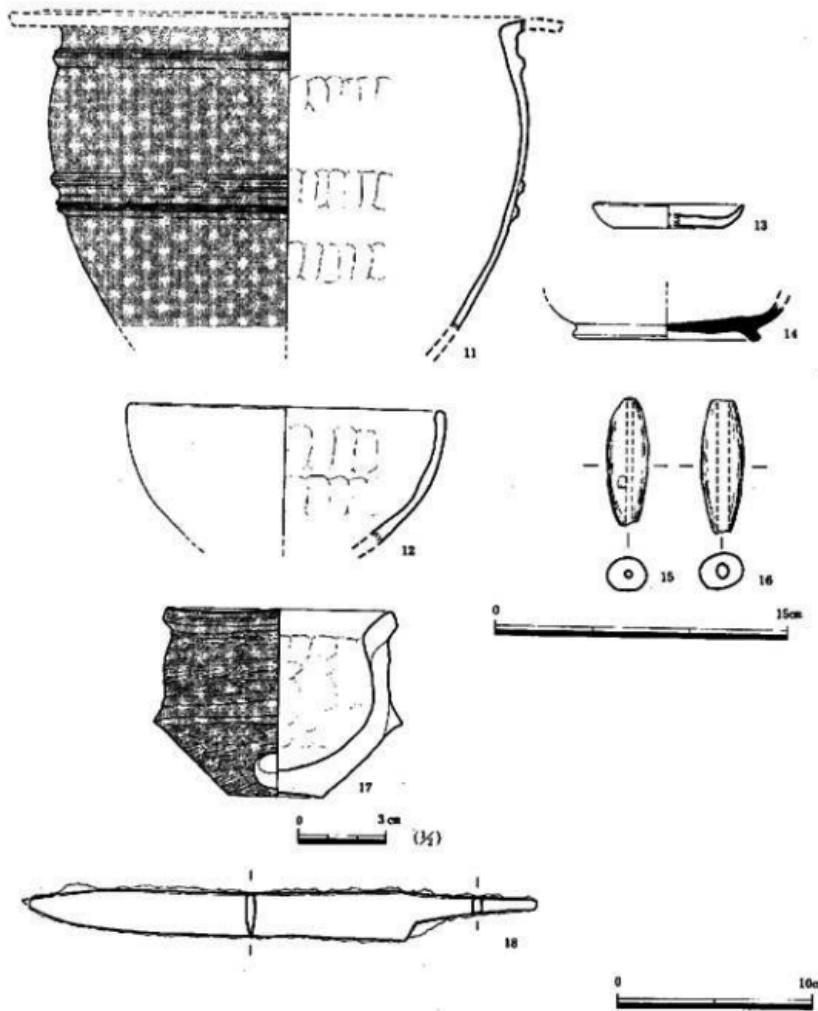
土鍤 (15, 16) 16は長さ6.6cm、最大幅2.1cm、17は長さ7.2cm、最大幅2.1cmを測る。ともに胎土は大粒の石英を含むほかは精良である。色調は淡橙色を呈する。

陶磁器

出土した陶磁器の大半は、日用雑器と窯道具に分けることができ、近代に属するものが大半である。日用雑器 (18~36) は碗、皿、鉢、灯明皿、土瓶、すり鉢、蓋等が多数出土した。

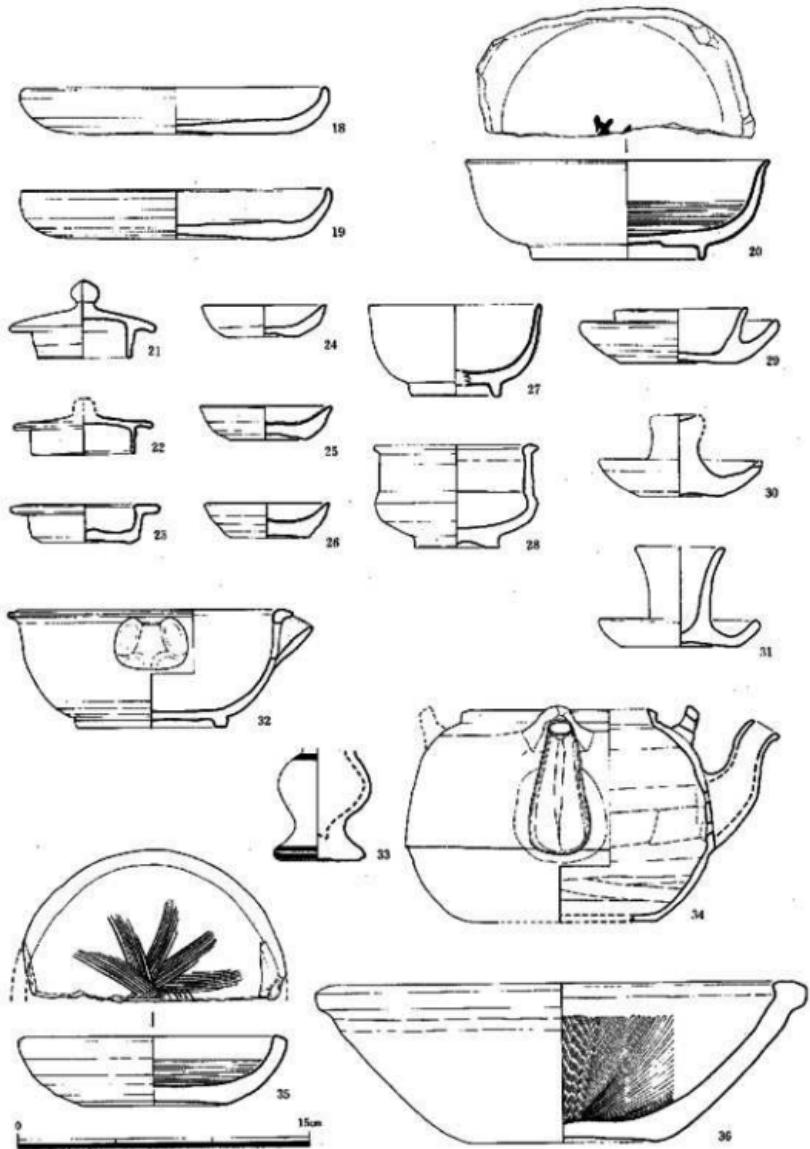
碗 (26) 数点の出土で、釉調がクリーム色に近いものと、黒味がかかった暗緑色を呈するものがある。

皿 (18, 19, 24, 25) 大形 (18, 19) のものと小形 (24, 25) のものに分れる。大形の皿は

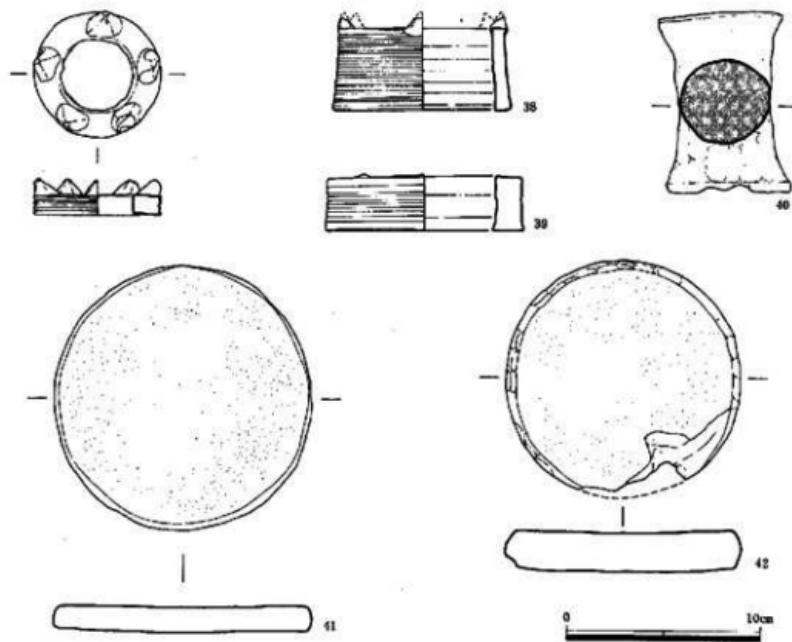


第21図 包含層出土遺物 (縮尺3分の1)

口径15~16cmで無軸。小形のものは径7cm前後で、23のみ内面に暗緑色の透明釉を施している。外底部にはいずれも糸切り痕を明瞭に残している。



第22圖 包金層、撿亂出土遺物(縮尺1/3)



第23図 包含層、搅乱、出土遺物(縮尺1/3)

鉢 (20, 28, 32) 大形から小形のものまで各種ある。20はくすんだ淡緑色の透明釉をしており、内底には素地に文字をヘラ描きしている。28は乳白色を呈する不透明釉を施したもので、素地は白色を呈する。32は全面露胎で、急須状に注ぎ口を持つ。

灯明皿 (29~31) 器形がバラエティーに富んでいるが、いずれも無釉である。ただし、29は内面に自然釉がかかっている。

土瓶 (34) 無釉である。注ぎ口部には4つの小孔を設けている。全面に 스스が付着している。これらの他にも花瓶 (33)、スリ鉢 (36)、ロウ皿 (35) 等が出土している。

窯道具 (37~42) 37~39, 41・42はハマ (スナドチ) で、ドーナツ状のものに脚をつけたもの (37~39) と円板状のもの (42, 43) に分れる。前者はロクロを使用して整形し、台座に5つの脚をつけている。外径は6.4cm, 9.2cm, 10.2cmを測る。台座側面にはハケメ痕を残している。後者はかなり砂を含む粘土を円盤状に整え、焼いたものである。径は11cmと13.2cmを測る。40はトチンで、両端が幅広い円柱状を呈している。砂粒をかなり含む。粘土を手づくねで整形したもので、表面に指頭圧痕が明瞭に残っている。焼成は極めて良い。これらの窯道具は明

治22年、当地の近くに築かれた高取焼に関するものであろう。

鉄製品

刀子（18） 切先を欠く。全長24.2cmを測る。両闘式で、刀部闘は斜目にカットしており、峰闘は三角形の小さな稜を有す。茎子は先細りで、断面は長方形を呈す。目釘穴は不明。峰はやや反っており、切先部は内反りさせる。身は銅のため中膨みとなっている。闘部幅2.5cm、刀身中央部幅2.3cm、厚さ0.3～0.4cm、茎子厚さ0.5cmを測る。銹化が著しい。上塙墓に副葬されていた遺物であるが、遺構を検出しえなかった。

4. 小 結

壺棺墓はわずか6基であったが、擾乱状況の著しさを考えた場合、少くとも10基程度は存在したものと思われる。壺棺墓は中期前半から後期初頭に至る時期である。藤崎遺跡では従来の調査にて編年が考えられており、これに従ってみると、K3、K4、K6はⅣ期に、K1はⅤ期、K5は^{±1}Ⅵ期に、K2はⅢ期に相当する。Ⅰ期は中期前半、Ⅶ、Ⅷ期は中期中葉、Ⅸ期は後期初頭である。

藤崎遺跡の壺棺墓の分布は国道202号沿線の調査が進んでいないだけに範囲の断定はできないが、地下鉄路線内の調査に頼るところが大きい。壺棺墓は砂丘の長軸線上に分布し、東西方向は約280mを測る。南限については第7次調査で報告したように、南側傾斜地に於ける壺棺墓^{#3}の検出数が減少していくこと、又、東西側の第8・10・11次調査の後背地に小丘があるため制限されること、西南側では、第9次調査に於いて壺棺墓が1基も検出されないことなどから推定できる。よって南限は202号線の道路センターラインから南へ50～70mの範囲であろう。北限については、西北に位置する第3次調査に於いて弥生時代の壺棺墓が1基も検出されていない事、北東側では藤崎派出所横や千眼寺前の地下鉄路線内調査に於いて壺棺墓が減少する傾向にあることが参考になる。旧西区役所からの壺棺墓の出土報告をも含めて考えれば、道路センタ一から北に30～40mの範囲が推定できる。よって幅は最大値が中央部分にあって約100mが考えられ、藤崎遺跡の壺棺墓の範囲は東西280m、南北70～100mの橢円形状の範囲が求められる。但し、旧刑務所跡を中心とする壺棺墓群は別のグループを形成しており、この藤崎遺跡の弥生時代中期における分村形態をとるものと解される。各時期の壺棺墓の分布位置についても既に報告されているが、第10次調査で検出したⅣ～Ⅵ期の壺棺墓は地下鉄路線内調査においては、藤崎派出所横から区役所前まで分布している。又、第2次・第7次調査では、この期の壺棺墓を約20基検出しており、この期の壺棺が壺棺墓群の東寄りに分布し、特に第10次調査から第7次調査の間に集中する傾向にある。

1号溝は矩形を呈した小溝であるが、陸橋部を有しているなど2号・3号溝同様の排水溝的機能を考える訳にはいかない。第3次調査での方形周溝墓群は古墳時代前半に比定されているが、規模は台状部が7.5～22m、溝幅は0.5～3.3m、深さは0.1～1.1m、陸橋部幅は1.0～4.5m

を測り、大・小の相違がみられる。特に三角縁神獣鏡を副葬していた6号方形周溝墓は盟主墓と考えられ、台状部径22~22.5m、周溝幅2.5~5.5m、深さ0.15~0.75m、陸橋部4.5mを測り、規模は壮大である。第10次調査の1号溝の規模は一辺約9m、溝幅1.0~1.5m、深さ0.4m、陸橋部の幅1mを測る。第3次調査で検出した6・7号墓の様な大規模方形周溝墓を除けば、周溝の規模としては近似する値をもつてゐる。これらの方形周溝墓は西側から東側方向へ築造され、且つ、特定家族墓から特定個人墓への変遷が把握できると云われ、その中でも特に強力な首長的個人墓の成長として大規模で、且つ、鏡を副葬した6・7号墓がみい出されるといふ。10号方形周溝墓は、第10次調査地の北西約50mに検出されたもので、非常に近い位置にある。その間に方形周溝的要素をもつ溝は無いが、立地の変遷や規模・構造からみて、第10次調査の1号溝が方形周溝墓である可能性は高い。とすれば主体部は木棺、又は粘土部が考えられる。又、第2・9次調査に於いても方形周溝遺構を検出しているが、これらを方形周溝墓とするならば、二列の方形周溝墓群の南側に若干の空間地を置いて三・四列目の方形周溝墓群が存在することになる。空間地によって群が分けられる事は、各々の方形周溝墓群の形成過程と存在意義にも影響を与えることになる。今後の継続的な調査が望まれるところである。

2号・3号溝は断面形V字形を呈し、栄山の北側を東西方向に走る。3号溝の蛇行に比べ、2号は直線的であり、旧道に対して並行関係にある。主軸方位は磁北から98°東へ振っている。当該調査区では2号・3号溝とともに弥生式土器片だけの出土であったが、東側の第8次・第11次調査では両者の溝底から十師皿を出土している。3号溝出土の土師皿は口径9.8cm、器高1.4cmを測るもので、有田遺跡第32次調査出土の土師皿の法量・器形とはほぼ一致する。よって、12世紀末の段階が考えられる。第10次調査の西側約70mには第2次調査地が存在するが、ここでは3号溝の延長部分は検出していない。よって、東側延長は不明だが、栄山の周囲を巡る可能性をもつてゐる。2号溝は3号溝に後出している。第8次調査出土の土師皿は器高が高く、口径が小さい。杯は5のように器高が低く、体部が聞くものと6の体部が丸味をもつて聞くものがあり。人宰府史跡SK601に一致する部分が多い。よって、2号溝は13世紀中頃～後半にかけての時期と考えたい。この溝は先述したように旧道と並行しており、202号溝の南側に沿って延びるものと思われる。又、元寇防壁とも約300m間隔で並行関係にある。文永の役(1274年)では、元軍は祖原山に陣を設けており、この一帯が戦場と化している。防壁の構築と元寇の役以後、約70年間に亘って防御体制がとられていたことから、元寇防壁の二次的防衛線の存在も考えねばならないだろう。

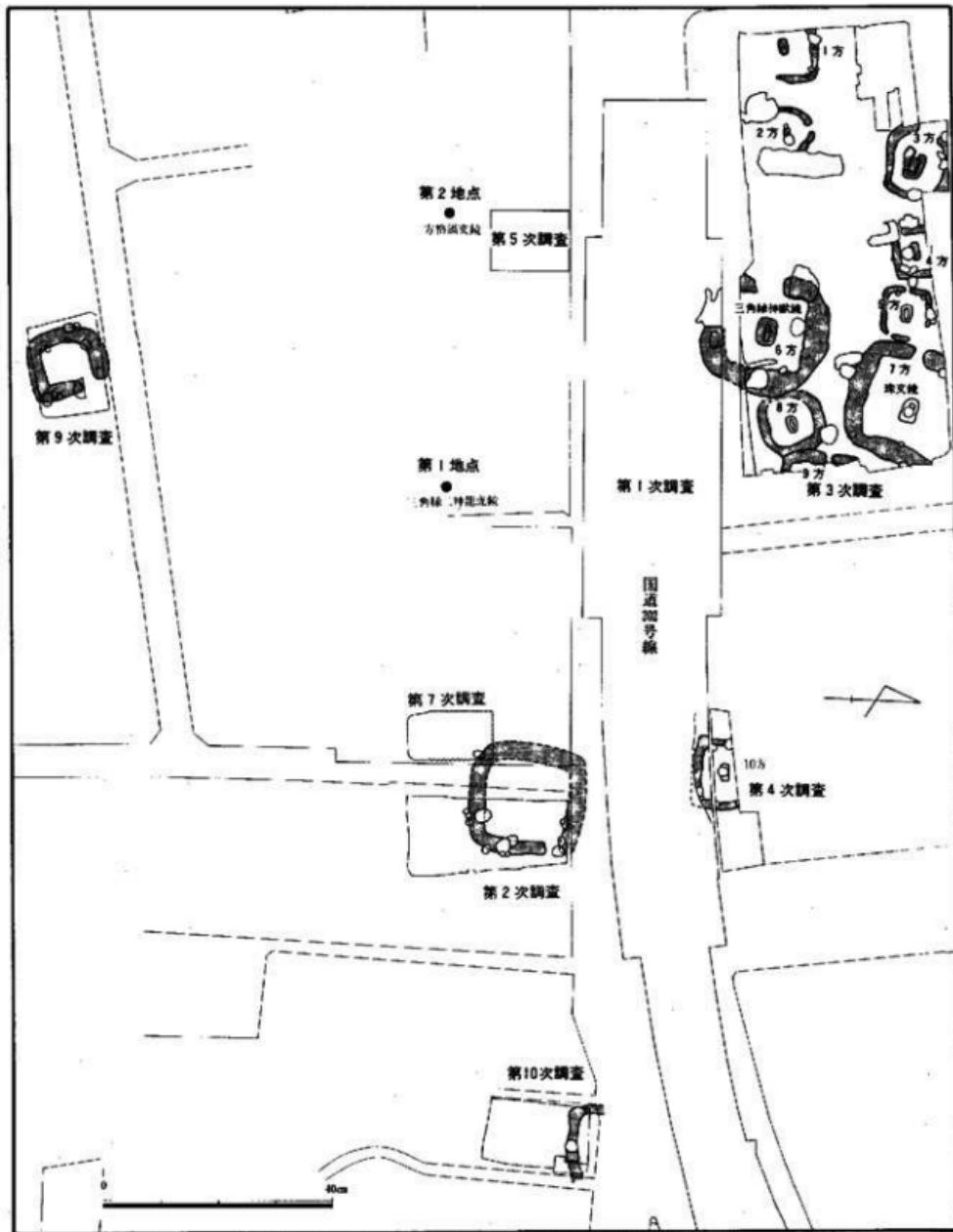
註1 福岡市教育委員会「西新町遺跡『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』」福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集 1982

註2 福岡市教育委員会「春崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集 1982

註3 福岡市教育委員会「春崎遺跡Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集 1986

註4 1978年(昭和53年)に福岡市教育委員会が発掘調査を行う。

註5 福岡市教育委員会「有田・小田部」第4集 1987



第24図 藤崎遺跡方形周溝墓、及び方形周溝造構配溝図(縮尺1/1,000)

VII章 第11次調査

1. 調査経過の概要

当該地は藤崎遺跡の東南端の標高約4mの砂丘上に立地するが、市街地化が進んでいる為、砂丘といいう面影はない。今回の調査は、賃貸高層住宅建設の計画に先立って行われたものである。昭和60年4月17日に前田常喜氏より、埋蔵文化財事前調査願が申請され、試掘調査の結果、遺構を検出した。申請者との間で充分な協議を行い、調査費の原因者負担による発掘調査を実施する事となった。期間は、同年10月23日から11月15日迄実施した。申請面積は443m²、発掘調査面積は230m²である。

遺構面迄の基本土壇は、地表より客上層0.6~0.8m、暗茶褐色細砂層0.3~0.5mで、遺構面は黄白色細砂層となる。暗茶褐色砂層は北側が薄く、南側が厚くなる。遺構面迄の深さは北側が0.8m、南側が1.4mと北から南へと深くなる。

遺構は弥生時代甕棺墓4基、中世溝3条、土壙2基である。近世、近代の搅乱のため残存状態は悪い。

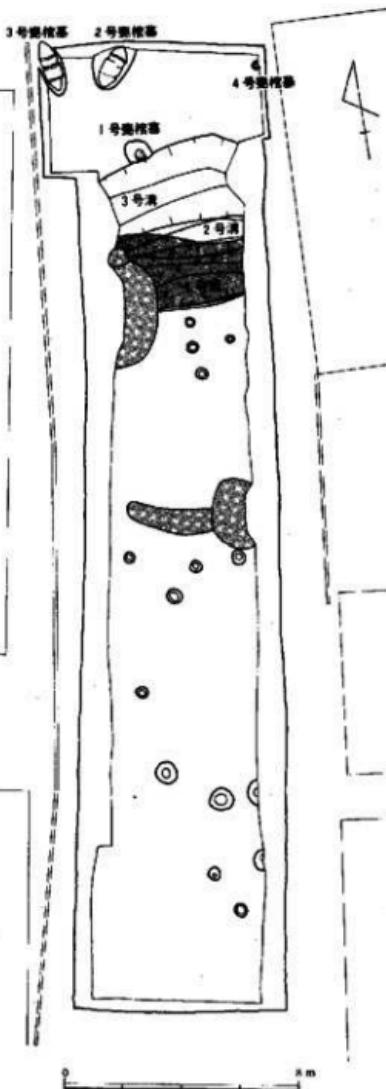
2. 遺構各説

(1) 甕棺墓

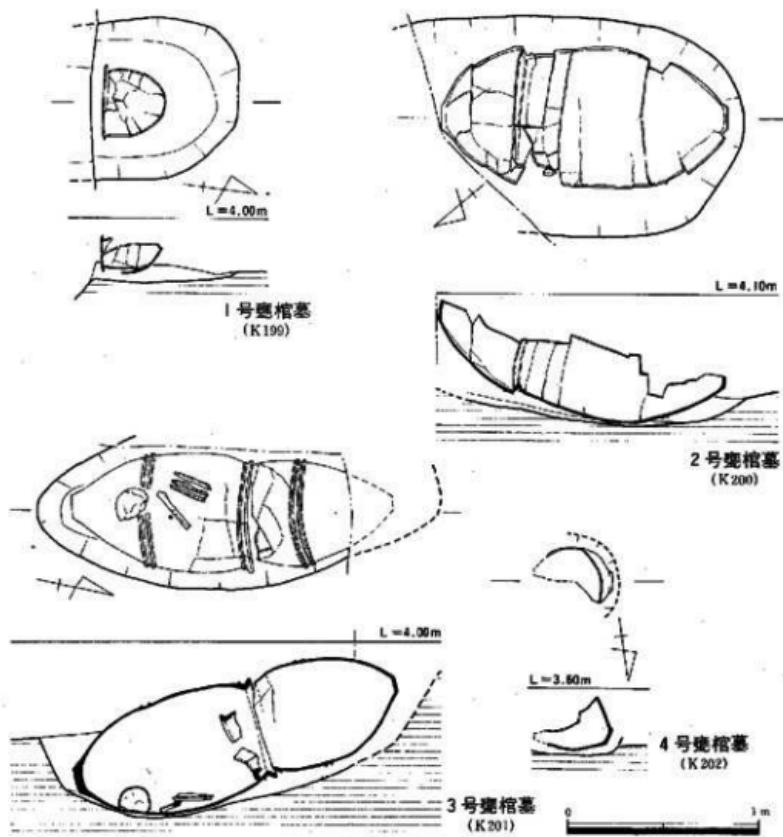
甕棺墓は調査区北端で4基検出した。そのうち2基は後世の遺構、搅乱のため全容はわからない。

1号甕棺墓（第26図、岡版15）

3号溝に隣接して検出された小児棺で、その南半を溝によって切られている。ほぼ1個



第25図 第11次調査遺構配置図(縮尺1/200)



第26図 1号～4号墓（縮尺1/30）

体分の葬が遺存している。単式葬棺か複式葬棺かは不明である。墓壙は現存長約80cm、幅約85cm、深さ約20cmである。主軸方位は、N-18°-Wで、ほぼ水平に埋置している。

2号墓（第26図、図版15）

調査区最北の境界地で検出した成人用覆口式葬棺墓である。墓壙はさらに調査区域外へと続いている。葬棺も墓壙も上半部を削平されている。確認した部分の墓壙の全長約170cm、幅約115cm、現存の深さ60cmである。埋置角度は14°、主軸方位はN-34°-Eである。

3号甕棺墓（第26図、図版15）

調査区北西端で検出した成人用呑口式甕棺墓で、北側と西側の墓壙ラインは調査区域外に続いているため不明である。主軸方位はN-11°-Wで、埋置角度は16°である。確認した部分の墓壙は全長約2m、幅約80cm、深さ75cmである。下甕内に成人男性の頭蓋骨及び四肢骨が遺存していた。なお、人骨についての所見は、『藤崎遺跡Ⅲ』に記載した。

4号甕棺墓（第26図、図版16）

調査区東北端で検出した。その大部分が搅乱によって破壊され、わずかに底部から胸部にかけての一部が残存しているのみで、詳細は不明である。甕棺の大きさから見て小児棺であろう。主軸方位はS-58°-E、埋置角度は25°である。

（2）溝

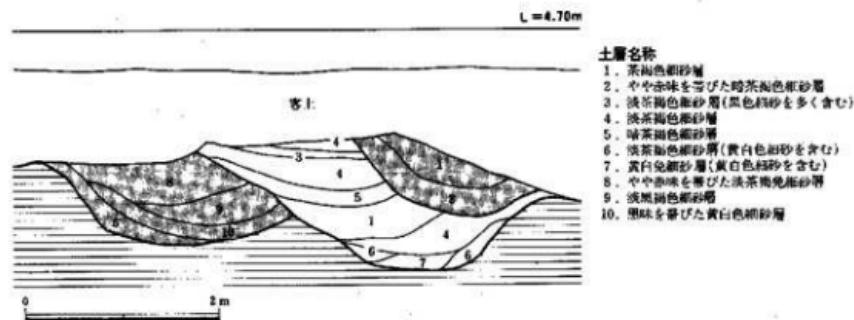
調査区北側で3本の溝が検出された。3本の溝はほぼ同じ場所で切り合っている。1号溝がもっとも新しく、3号溝がもっとも古いが、時期的には大差ないものと思われる。

1号溝（第27図、図版14）

ほぼ直線的で、東西方向に延びる溝で、断面形は逆台形を呈する。幅は2.0～2.5m、深さ約70cmを測る。第8、10次調査区では検出されていない。主に弥生時代と鎌倉時代の遺物を含んでいる。

2号溝（第27図、図版14）

幅約2.5～3.0m、深さ約1.3mで、断面は逆台形を呈する。1号溝とはほぼ重なっている。この溝は第8次調査区の1号溝、第10次調査区の2号溝とつながる。弥生時代～鎌倉時代の遺物を



第27図 1号～3号溝断面七層図(縮尺1/60)

主に包含している。

3号溝（第27図、図版14）

南西—北東方向に延びる溝であるが、調査区東端近くでやや鈍角にまがっている。第8次調査区の2号溝とつながり、さらに第10次調査区の3号溝へ至るものと思われる。幅3.0~3.5m、深さ約90cm、断面形は逆台形を呈する。弥生時代～鎌倉時代の遺物を包含している。

（3）上 墓

上墳は調査区北側で2基検出された。いずれも溝の埋没後に掘り込まれており、覆土は黒色を呈している。中世以降、近世に近い時期の所産であろう。

1号土壙

長さ約3m、幅約60cmの楕円形に近い不定形のプランで、深さ10~17cmを測る。断面形は浅い逆台形である。遺物は土器の小片を少量含んでいるのみである。

2号土壙

長さ約2.3m、幅約0.7~1m、深さ10cm前後の上墳で、断面形は逆台形を呈する。西側は搅乱によって切られている。覆土は2号土壙と同じく黒色に近く、出土遺物は土器片が少量あるのみである。

3. 遺 物 各 説

（1）甕 棺（第28・29図、図版16）

1号甕棺

内傾する逆L字状の口縁部を持ち、底部はわずかに上げ底である。口縁部はヨコナデ、胴部は外器面がタテハケ、内器面はナデを施している。焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈している。

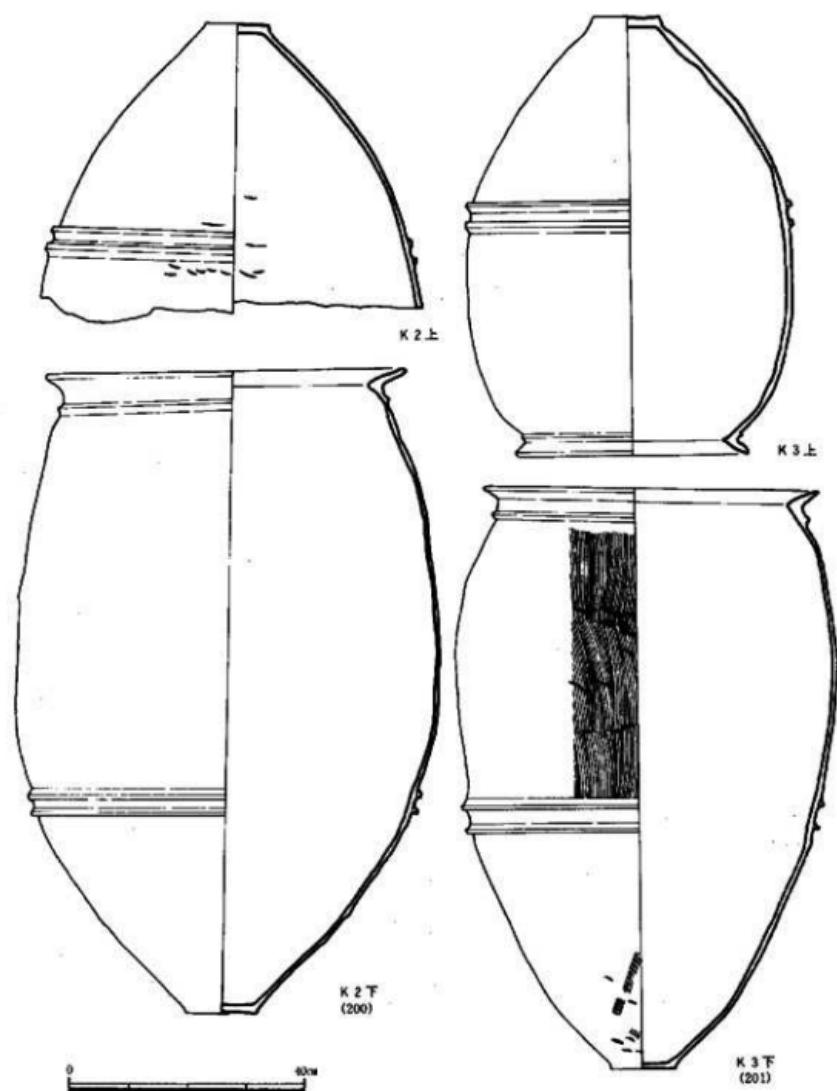
2号甕棺

上甕 脊部最大径付近から上の部分を欠く、胴部下位と思われる部分に断面M字形の突帯を2条貼りついている。全体に木製工具によるナデ調整を施したのち、ヘラナデを施す。いわゆるタタキ状の痕跡が多く見受けられるが、特に底部と突帯近くに多い。黒斑が多い。

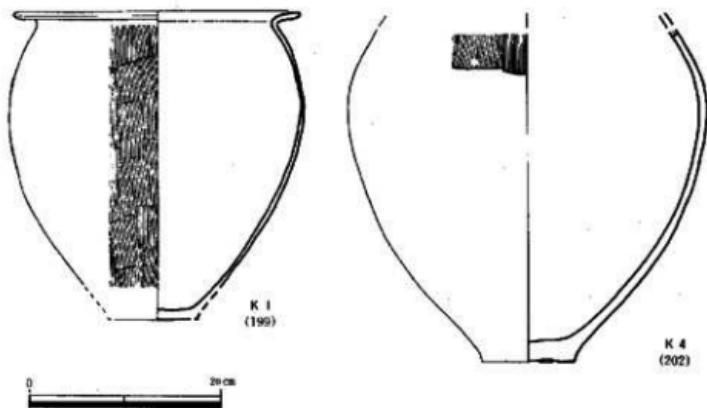
下甕 やや内傾する逆L字形口縁部を有する。胴部下位に断面台形の突帯を2条、頭部に断面三角形の突帯を1条巡らしている。外面は木製工具によるナデ、内面はナデ調整を施している。上甕と同様、タタキ状の痕跡が多いが、木製工具によるナデの始まり部分の圧痕かと思われる。

3号甕棺

上甕 かなり内湾する逆L字形口縁部を有する。胴部最大径付近に断面台形の突帯2条を巡らしている。外面は木製工具によるナデの後ヘラ（？）ナデ。内面はていねいなナデである。底部はやや上げ底である。



第28图 2号·3号斐棺尖測図(縮尺3/4)



第29図 1号・4号櫛棺実測図(縮尺1/6)

下縁 やや外傾する逆L字口縁を有する。頭部には断面三角形の突帯を1条、胴下半部に断面M字形の突帯を2条施す。頭部から胴下半部にかけて、赤色顔料が点々と施される。意識的に塗ったよりも、こぼれ落ちた感が強い。外面にはハケメと、いわゆるタタキが認められるが、タタキ状の調整はハケメの始まり部分であろう。又、内面はナデ調整である。

4号櫛棺

底部から胴部最大径付近にかけての破片で、外面はタテハケの後ナデ調整を施し、内面はナデ調整である。

(2) 溝出土遺物 (第30図、図版16)

1～3号溝はいずれも弥生時代。鎌倉時代の遺物を主に包含しており、特に櫛棺片、土師器の皿片を多く出土し、同安窯系白磁片等もある。また古墳時代の土器片も出土するがいずれも小片が多く、図示し得たのは少ない。

2号溝出土遺物

瓦類

平瓦 (5) 現存長16.2cm、幅12.8cm、厚さ2.0cmの須恵質の平瓦片で、表面に斜格子の叩き痕、裏面に布目痕を有している。また両面とも自然釉が濃密にかかっている。

第3表 第11次調査櫛棺計測表

(単位: cm)

計測部位	No.	櫛棺				
		1号櫛	2号上櫛	2号下櫛	3号上櫛	3号下櫛
頭 部 径	11	29.5		62.0	40.0	57.5
胴 部 最 大 径		30.0	65.0	71.5	56.0	6.55
器 高		32.0	40.0	110.5	76.0	100.0 (34.5)

3号溝出土遺物

土師器

皿（2） 口径9.8cm、器高2.2cmの皿である。底部は糸切りで、板目痕を有している。焼成、胎土ともに良く、淡黄褐色を呈している。

軽石製石製品

（4） 直径3.5cm前後の略球形に近い小軽石を切断した後、全面を研磨したもので、長さ約1.3cmの線刻が観察できる。浮子であろうか。

（3）表土、搅乱出土遺物（第30図、図版16）

表土、搅乱の出土遺物の大半は近世、近代陶磁器で、特に高取焼関係の遺物が多い。弥生時代、鎌倉時代の出土遺物も少なくないが、そのほとんどは細片である。

弥生式土器

甌（3） T字口縁を有し、肩部に断面三角形の凸帯を1条巡らしている壺形土器である。口唇部及び口縁部外器面に赤色顔料を塗付している。調整は、外器面及び口唇部、口縁部内器面がヨコナデ、口縁部以外の内器面は指ナデである。

青磁

碗（1） 龍泉窯系青磁の碗の口縁部片である。内器面に劃花文を彫り込んでいる。素地は青灰色で、釉調はオリーブ色の透明釉である。

近世、近代陶磁器

皿（8） は階褐色の鉄釉を塗った磁器の底部片で、外底に糸切り模様が残る。素地は青灰色を呈する。

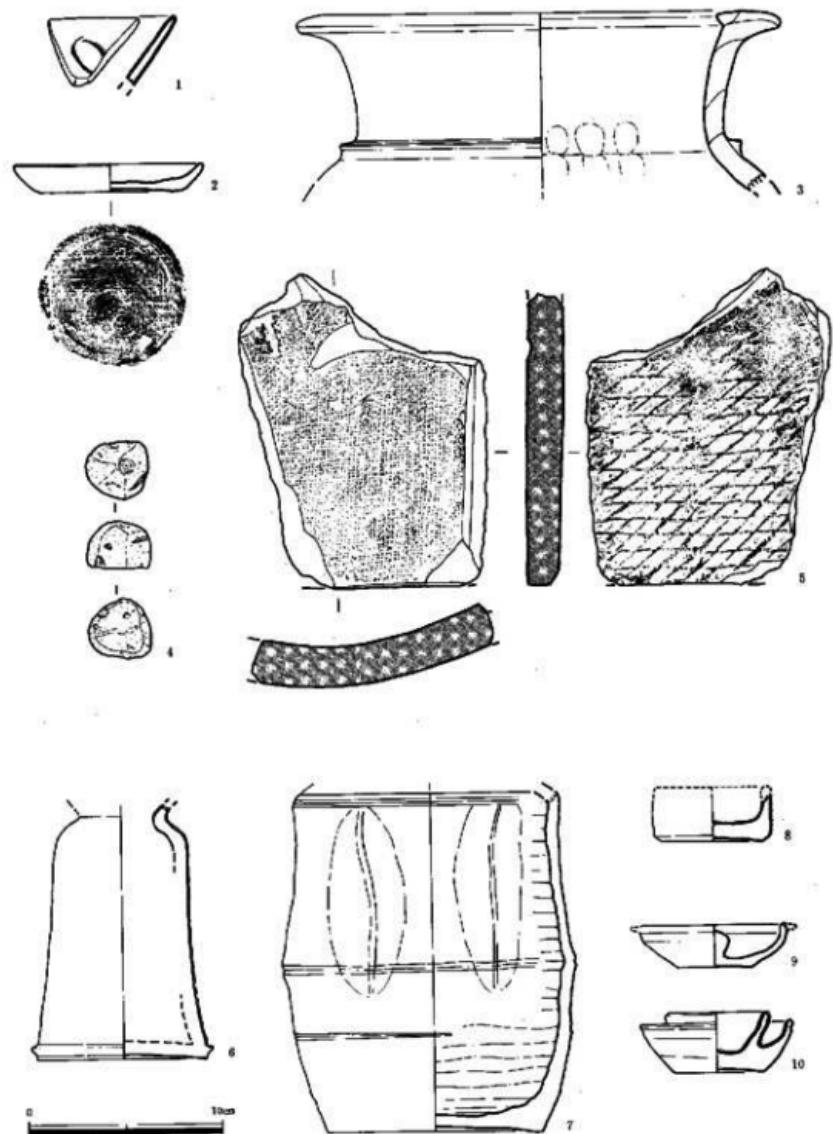
仏花器（6） 底部に糸切り模様が残る磁器である。外器面に淡黄褐色の透明釉を施した後、頸部にのみ、クリーム色の釉を上塗りしている。内器面は、約半分程淡黄緑色の釉が流れている以外は露胎である。素地は青味を帯びてくすんだ灰白色を呈している。

瓶（7） 口径14cm、器高17.3cmを測る。素焼きである。肩部の上半部と下半部の2ヶ所を把手状に凹ませている。また口縁部に1条、胴部に2条の沈線を施している。明赤褐色を呈し、胎上、焼成ともに良い。

蓋（9） 内器面に把手を持つ。全体に淡黄褐色を呈し、内器面に自然釉がかかっている以外は露胎である。

灯明皿（10） 全体に淡灰褐色を呈している。

搅乱からは、この他にも多くのハマの破片が出土しており、ここで出土した高取焼も明治時代中期以後の高取窯に関連するものであろう。



第30図 出土遺物 (縮尺 1/3)

4. 小 結

以上今回の調査の概要について述べた。これらをまとめると、以下のとおりである。

1. 今回の調査地点での遺構は大きく2時期に分けられる。I期は、弥生時代中期後半から後期初頭迄で、4基の甕棺墓の時期である。II期は中世、13世紀頃と考えられる1~3号溝の時期である。
2. 砂丘面は北から南へ深くなつておき、南側では、頁岩で構成される独立丘があり、砂丘はその独立丘の北端で終わる。
3. 遺構の検出範囲は、独立丘の北端迄であり、藤崎遺跡の南限と考えられる。
4. 中世の溝状遺構が3条検出されている事から、藤崎遺跡では弥生時代から古墳時代の遺構だけでなく、中世の遺構についても今後注意を要する。

VII章 第4発見地の報告

1. 発見の概要

当該地は、福岡市早良区高取2丁目17番地に所在する。昭和60年2月初頭に、高取在住の藤井豊氏によって発見の報告と経緯を受けたものである。藤井氏はポンプ店を経営しておられる。昭和50年頃に当該地（前田サヨ氏宅）の井戸掘りを請け負われ、工事に際して厚手の土器1つと小型壺形土器が出上した。井戸の掘り方は径2.5mを測り、深さ1.5mから厚手の鉢（甕）が破片となって出土した。これに伴い、第31図に示した彩文の小型壺形土器が出上したと云われる。彩文土器については、藤井氏によって保存されていたが、残念な事に厚手の土器片は全て廃棄されていた。厚手の土器片は甕棺片と考えて良く、口縁部片には刻み目が施してあったとの事から、前期後半から中期初頭の大型化した甕棺が考えられる。但し、この小型壺形土器は、弥生時代初頭と考えられるところから、この甕棺と壺形土器の共伴関係については、甕棺片が残存していない段階では結論を出せない。一般に、甕棺に壺形土器が共伴する段階は板付1式併行期の甕棺や、金海式甕棺に認められるところであり、それ以前については甕棺は小型であり、共伴例はない。弥生時代前期の例では、^{井1}藤崎遺跡第2調査や^{井2}夜須町沼尻遺跡、^{井3}筑紫野市道場山遺跡^{井4}2地点、支發支石墓などの上墳墓に副葬される例が多い。当該地は甕棺墓と土塚墓が集中する地域もあるから、壺形土器の年代や墓制の時期的な傾向からみても、この壺形土器が上墳墓に副葬されていたものと考えるのが妥当であろう。

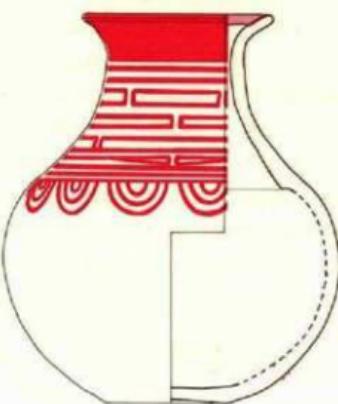
尚、この壺形土器については、藤井氏の御好意により、福岡市教育委員会に寄託していただいたことを明記しておく。

2. 出土遺物について

小型壺形土器（第31図、図版17）

口縁は一部を残して欠けている。器高13.9cm、口径6.7cm、胴部最大径11.6cm、底径4.2cmを測る。胴部は球体を呈し、上げ底の小さな底部がつく。底部は胴部との境に若干、段を有している。頸部と胴部の境は段や沈線がないが、わずかに肩が張り、屈折を付けている。内面には接合部に明瞭な段を形成する。内傾した頸部は緩く外弯し、小さく外反する口縁部に接続する。境には小さく屈折がつき、口縁部は細く、丸味をもっている。頸部内面から外底までは、ヨコ方向の細かいヘラ研磨を施す。内面はナデ調整である。外面の口縁部から肩部には赤色顔料によって彩文を施す。彩文の仕方は口縁部、頸部、肩部の三ヶ所毎に違う。口縁部は内面側の幅約0.8cmから外側の幅1.8cmまでの範囲に帯状塗布する。頸部は幅1.5mm程度の巻線を2.5~3.0

mm間隔に施す。上部の2条と最下位の条を圓線とし、その内側は雷文又は流水文の変形文を施す。この雷文帯は一組2条を単位として3単位で構成される。各単位は、更に各々2mmの間隔で3分割している。3段目の1ヶ所は完全に分断せず、上線を折り返している。各単位の1段目と3段目、2段目と4段目の雷文単位は分割線の位置が一致し、2段目と4段目の分割線は1段目と3段目の分割線の中間に位置するため上位よりみれば、この雷文又は流水文は6分割した状態にみれる。又、4段目の単位の内、1ヶ所は下段の圓線が下から2条目の線に接合し上段の圓線は3段目の圓線に屈折して接合し、分割線を形成する。鍵形の分割線を呈している。肩部の彩文は三重の連続円弧文である。胎土は精選しており、焼成は良好である。体部下位に黒斑が一ヶ所ある。黄褐色を呈している。外面に黒色顔料が施されていた可能性があり、部分的にカーボン状の黒色顔料が付着している。焼成。胎土からみるかぎり、弥生式土器であるが、口縁部から肩部の作りや底部の状態からみて夜白式土器の形態を強く残した土器と云えよう。



第31図 第4発見地出土遺物(縮尺1/2)

註1 福岡市教育委員会が昭和53年に発掘調査を実施し、小形変形土器を埋葬した土塚墓2基を検出した。

註2 甘木市教育委員会「夜須町東小田沿岸道路」甘木市史資料一考古編 1984

註3 福岡県教育委員会「九州純質自動車道沿岸埋蔵文化財調査報告書XV」1978

註4 松尾裕作「北九州支石墓の研究」1957

3. 小型彩文壺形土器に用いられた赤色顔料について

藤崎遺跡第4地点出土の小型彩文壺形土器に用いられた赤色顔料について、光学顕微鏡法とX線分析法により、顔料の種類を明らかにし、その使われ方について若干の考察を試みた。

赤色鉱物の同定

赤色彩文の下地には黒色顔料が使われているが、口縁部内面の帯状彩色部分には黒色の下地が認められないので、この部分から赤色顔料を約5mg採取した。その中から針先により微量の試料をとりプレパラートを作成した。残りの全量を螢光X線分析、X線回析分析の試料とした。

反射光により200倍～400倍で検鏡を行なった。赤色鉱物として、朱HgS・赤色硫化水銀の粒子を認めた。また、朱なのか、ベンガラFe₂O₃・酸化第二鉄なのか光学顕微鏡では判断しがたい粒子も存在した。

主成分元素を知る目的で螢光X線分析を行なった。主成分元素としてFe、Hgが検出された。Feは土器胎土、ベンガラの主成分である。また赤色の由来となる鉱物成分を知る目的でX線回折分析を行なった所、HgSのピークを確認した。Fe₂O₃の顯著なピークは認められなかった。

以上の結果は、1. 朱の粒子が確認された、2. 主成分元素はFe、Hgである、3. HgSが確認された、の3点である。

藤崎遺跡第4地点出土小型彩文壺に用いられた赤色顔料は、朱を主成分とするものである。現時点では、このFeが、朱の不純物としての鉄分であるか、ベンガラによるものか、不明である。

土器・木器に用いられた赤色顔料としては、朱、ベンガラの両者が知られている。朱と報告されている場合でも、そのほとんどは鉄を含んでいる。これらは多くの場合、土器胎土に起因するものと扱われている。しかし、顔料としてのベンガラ粒子が「ない」ことを確認しない限り、Feが胎土にのみ起因するとは考えられない。本例も含めて今後さらに詳しく調査していくたい。

考 察

本例の小型彩文壺に用いられた顔料は朱を含むものであったが、実際には朱をまったく含まないベンガラもある。焼成後の赤色塗彩土器ではむしろこのベンガラ塗りの方が多いわけであるから、赤色顔料に朱を含むか含まないかという点は重要である。

四日市市尾平町永井遺跡では、縄文晚期～土師器までの赤色塗彩土器11点のうち、朱を検出したものの3点、それ以外はベンガラ塗りであり、この3点の土器はいづれも弥生前期のミニチュア土器である（藤井1978）。また、東大阪市巨摩庵寺遺跡では弥生時代中・後期の土器等13点のうち、中期の異形鉢形土器、再利用の菱形土器片、用途不明の木製品の3点には朱が検出

され、他はベンガラのみが用いられている（安田他1982）。両例とも報告者は「祭祀用には特別に朱を用いる」という顔料の使いわけを想定している。本例が土壙墓副葬小壺であると考えられることは非常に興味深いものである。類例の分析を期待したい。

さて、夜臼式以前の縄文土器で朱を用いた例は北九州市長行遺跡で確認されている（成瀬1983）。晩期前半の土器片8点のうち5点に朱が、3点はベンガラが塗られていた。朱が塗られていたものとベンガラが塗られていたものとに差はなく、いづれも黒川式併行の浅鉢形土器である。

ところで、埋葬に赤色顔料を伴う例は縄文時代後期よりあるが、弥生時代の要棺墓には朱が施される例が多数ある。ここで注意したいのは、中期後半の要棺墓出土赤色顔料が本例に見られるような朱・ベンガラの判断のしがたい粒子を含むものではなく、はっきりと朱の粒子から成るということである（本田1978）。また、鉄分を含まない朱の出現はどこまで遡れるのだろうか。石崎曲り田遺跡11号要棺墓出土の朱にはFeが検出されていない（上原他1983）。あるいはこれが初現かとも思われるが、同時にCuの検出も報告されているので、残念ながら現時点では判断できない。

今後、縄文晩期の赤色塗彩土器・弥生時代初頭から前期の彩文土器に用いられた赤色顔料および埋葬に伴なわれる赤色顔料を併せて調査することにより、赤色顔料の種類と使われ方に規則性を見出すことができると思われる。

正倉院事務所成瀬正和氏には、X線分析の測定を快くお引き受けいただき、また縄文土器の赤色についても御教示を得ました。心から感謝いたします。
（本田光子）

* 蛍光X線分析：理学電機工業K・K製螢光X線分析装置（大型試料台付）を使用。X線管球；クロム対陰極、印加電圧-電流；40KV-20mA、分光結晶；弗化リチウム、検出器；シンチレーションカウンター、走査範囲(2θ)；20°-65°、走査速度；201°/分、時定数；0.5s。

X線回折分析：理学電機T字K・K製X線回折装置を使用。X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧-電流；27.5KV-10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散スリット；0.34°、受光スリット；0.34°、照射野制限マスク；(透路幅)2mm、走査範囲(2θ)；160°-10°、走査速度；2θ2°/分、時定数；2

文献

成瀬正和「長行遺跡出土の赤色塗彩土器について」『北九州市埋蔵文化財調査報告第20集』1983

藤井孝次「螢光X線による赤色顔料の分析-四日市市尾平町永井遺跡出土土器を中心に-」『三重考古』2.1978
安田勝也、奥野礼子「巨摩磨寺遺跡出土遺物にみられる赤色顔料物質と人骨に付着した赤色顔料物質の化学分析」『巨摩・瓜生堂』財団法人事大文化財センター-1982

本田光子「赤色顔料の分析について」福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9. 1978

上原周三、長哲二「11号要棺内出土はりがね状金器および赤色顔料の螢光X線分析」福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』8. 1983

図 版

博多湾



藤崎道路周辺航空写真（昭和55年11月撮影、1/50,000） 1 藤崎道路 2 西新町道路



(1)藤崎遺跡第8次調査地点遠景(東から)



(2)調査終了完掘状況(南から)



(1) 1号要棺墓出土状況（北東から）



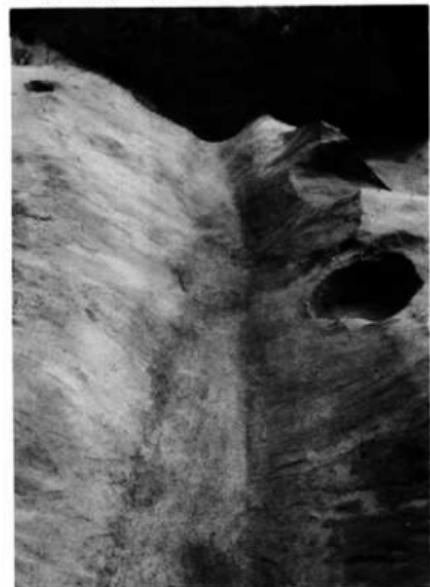
(2) 2号要棺墓出土状況（西から）



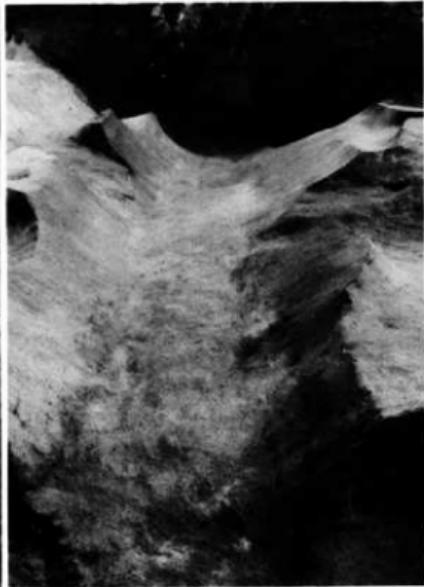
(3) 1号井戸土層堆積状況（南から）



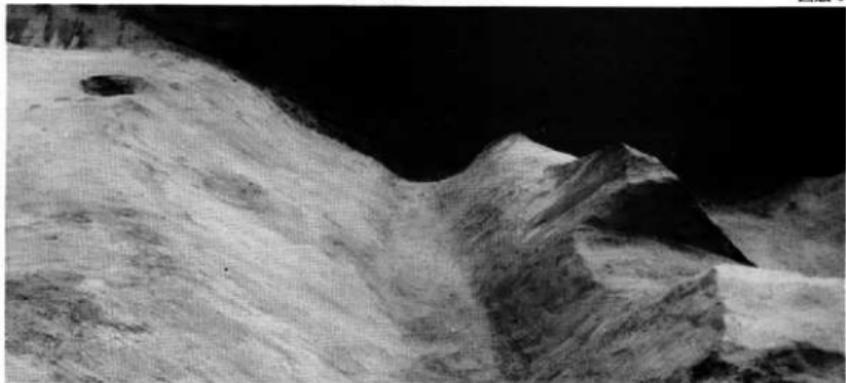
(4) 1号井戸完掘状況（北から）



(5) 1号溝完掘状況（西から）



(6) 2号溝完掘状況（西から）



(1)調査区東壁における1号・2号溝切り合い状況(西から)



(2)1号甕棺(1/6)

(3)2号甕棺(上)(1/6)

(4)2号甕棺(下)(1/6)



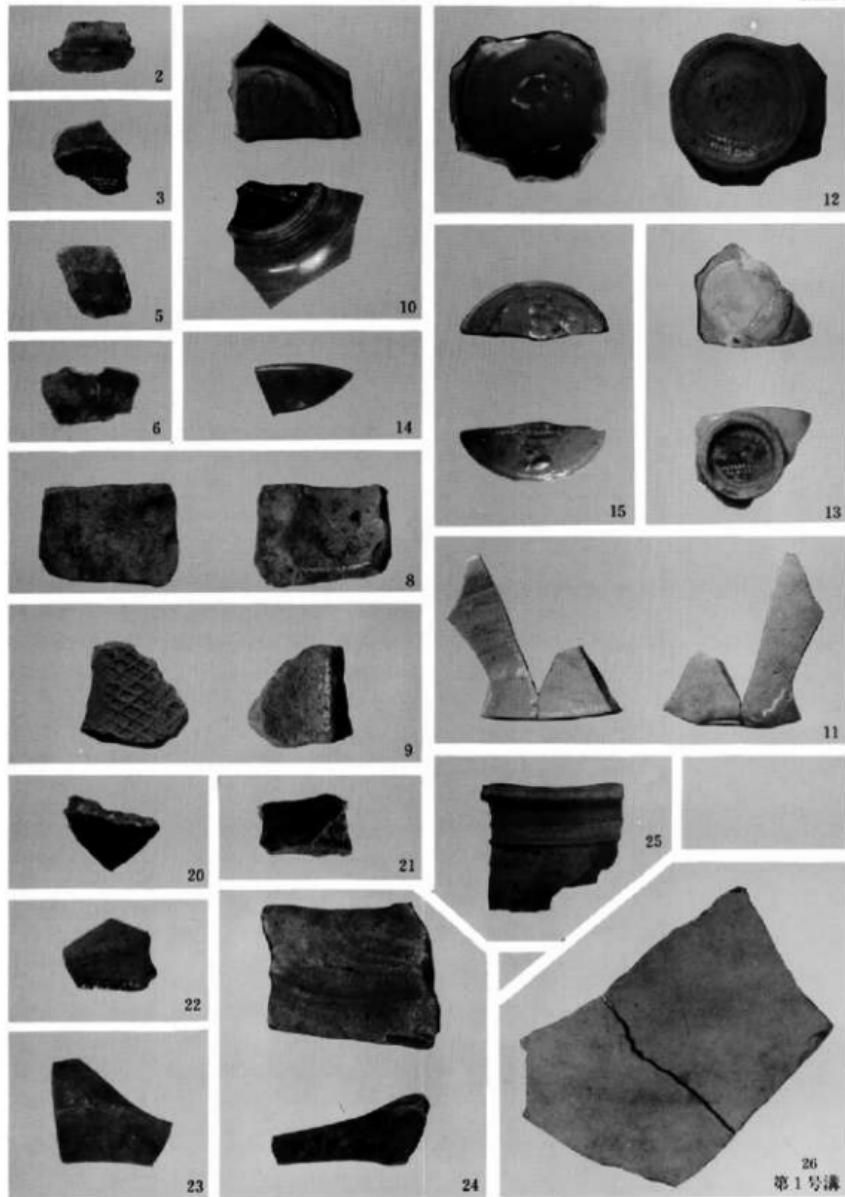
3



4

藤崎遺跡第8次調査

図版5



出土遺物(約1/3)

第1号溝



(1) 蘿崎遺跡第10次調査区近景(北から)



(2) 調査区全景(南から)



(1) 小型破片(外側)



(2) 小型破片(内側)



(3) 大型破片(外側)



(4) 大型破片(内側)



(1) 6号墳石室(西から)



(2) 2号土塁(南から)



(3) 3号土塁(東から)



(4) 4号土塁(東から)



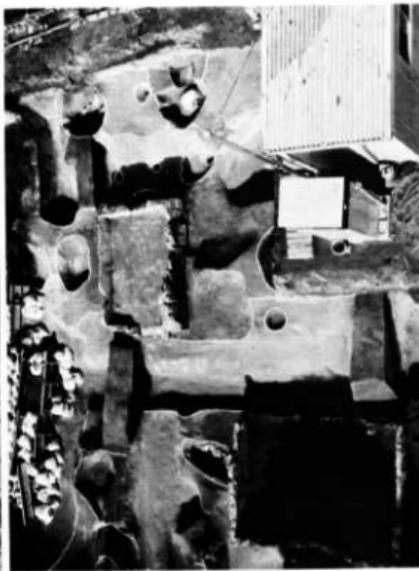
(1) 6号土坑



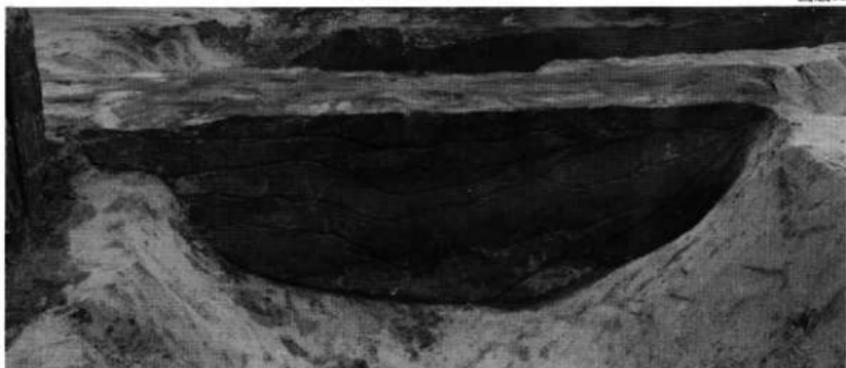
(2) 1号・2号窓(井戸心)



(3) 3号窓(井戸心)



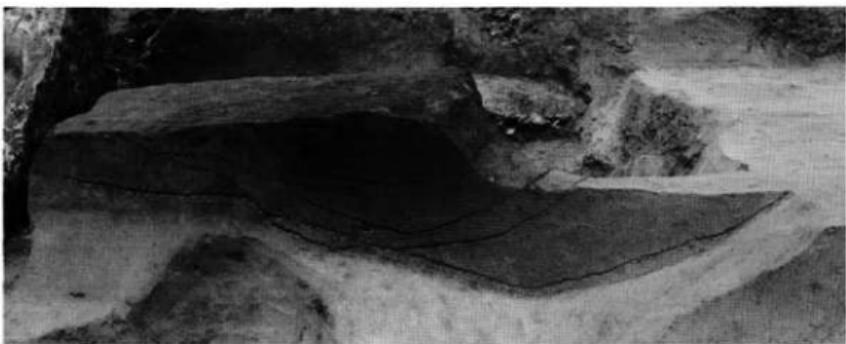
(4) 1号・2号・6号窓(井戸心)



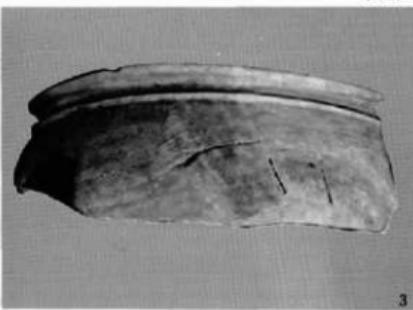
(1) 1号溝土層状態



(2) 2号溝土層状態



(3) 3号溝土層状態



出土遺物 (1)(2)1号甕棺、(3) 2号甕棺、(4)(5) 4号甕棺



1



3



2



4

出土遺物 (1)(2) 5号甕棺、(3) 6号甕棺、(4) 3号甕棺



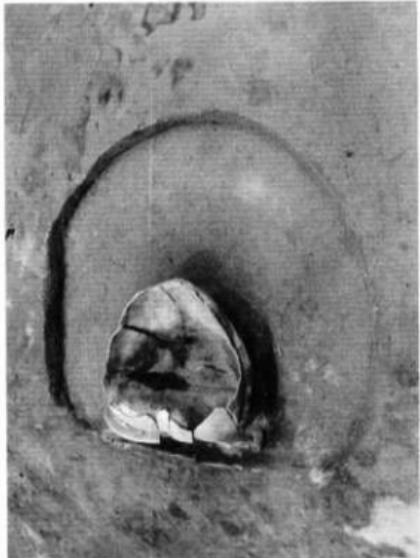
出土遺物（縮尺：約1/3）



(1) 藤崎道路第11次調査区全景(北から)



(2) 1号櫛状墓、2号・3号溝(西から)



(1) 1号櫛柄鏡(東から)



(2) 2号櫛柄鏡(西から)



(3) 3号櫛柄鏡(西から)



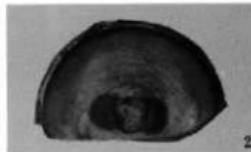
(4) 3号櫛柄鏡内人骨出土状態



(1) 4号墓



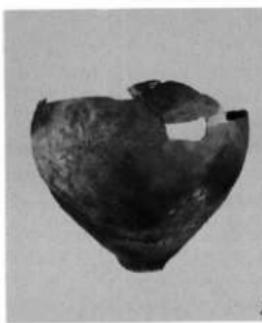
1



2



3



4



5



6

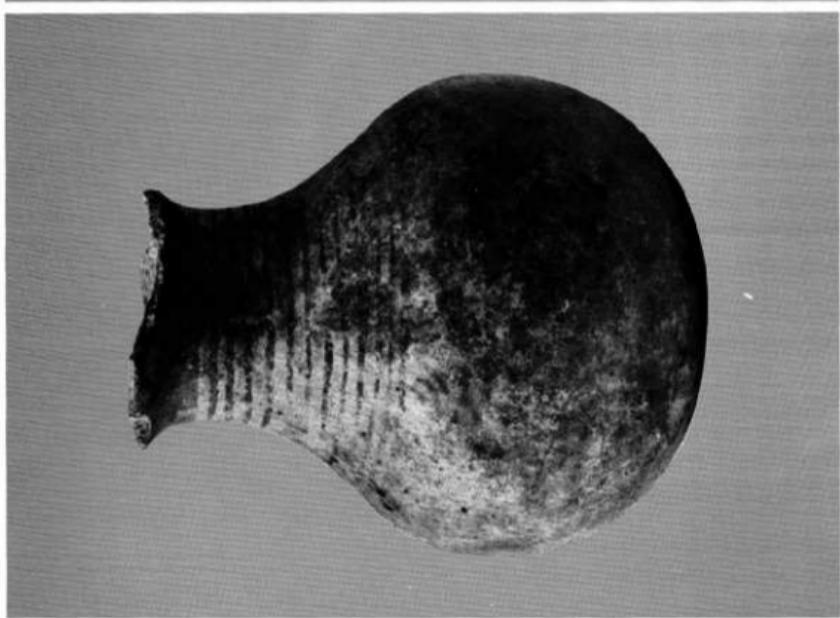
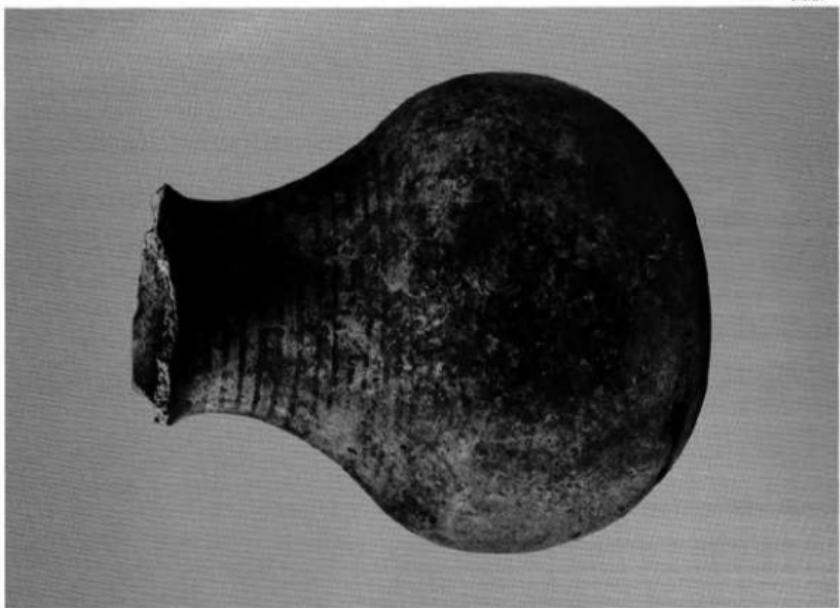


7



8

(2)出土遺物(3・1号墓 5・8, 2号墓 6・7, 3号墓 4, 4号墓 1・2, 掘乱)



第4発見地出土遺物

藤崎遺跡 IV

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第138集

1986年（昭和61年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-7-23

印刷 福博綜合印刷株式会社